

WIN PROJECT WIN

平成30年度
学校地域WIN-WINプロジェクト実践報告書



埼玉県マスコット
「コバトン」・「さいたまっち」

平成31年3月
埼玉県教育委員会

はじめに

これからの時代は、少子高齢化や飛躍的な技術革新など、今までに直面したことのない、予測困難な時代になることが予想されます。

そのような時代を担う子供たちが、心豊かでたくましく成長していくには、子供の頃から社会や人々と関わり、多様な経験をすることが大切です。

地域にある多様な人的・物的資源を活用した学びは、個々の教科などでの学びを深め広げるだけでなく、主体的に考え行動したり、他者と連携・協働することなどを学ぶとともに、地域が人を育て、人が地域を作る好循環を生み出します。

本県では、平成30年度の新規事業として県立学校において、学校外の人的・物的資源（企業・NPO・市町村・地域人材など）を活用した実社会からの学びを充実するとともに、学校の力を地域で生かす取組「学校地域WIN-WINプロジェクト」を実施しました。

このプロジェクトは、実践研究校5校（小川高校・庄和高校・鳩山高校・吉川美南高校・越谷西特別支援学校）を指定し、年間を通して地域との連携に取り組みました。また、実践研究校の成果の普及と教職員と企業等の交流の機会であるフォーラムの開催や、学校と企業をマッチング・コーディネートして教育を実践するなど、合わせて3つの取組を行いました。

これらの取組により、生徒は、地域の良さや特徴、課題を知るとともに、多様な人々との関わりを通して、主体性や思考力、自己肯定感を得ることができました。教職員や地域の方々は、次代を支える子供たちが、高校でどのような力を身に付けるのか、大人たちがそれぞれの立場で何ができるのかなどについて、考える機会となりました。

本報告書では、実践研究校などの優れた取組事例を紹介しております。今後、多くの学校で継続的に実社会からの学びを充実できますよう、本報告書を御活用くださいますようお願いいたします。

結びに、「学校地域WIN-WINプロジェクト」の取組に御理解・御尽力いただきました皆様、並びに本報告書の作成に当たり、実践事例の掲載に御協力いただきました皆様に、心からお礼を申し上げます。

平成31年3月

埼玉県教育委員会教育長 小松 弥生

1 学校地域WIN-WINプロジェクト	
概要	2
2 学校地域WIN-WINプロジェクト実践研究校の取組	
実践研究校5校の概要	5
埼玉県立小川高等学校	6
埼玉県立庄和高等学校	10
埼玉県立鳩山高等学校	14
埼玉県立吉川美南高等学校	18
埼玉県立越谷西特別支援学校	22
3 学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラムについて	
フォーラムについて	28
アンケート集計	33
4 教育プログラム	
教育プログラム一覧	36

参考資料（フォーラム資料）

【学校地域WIN-WINプロジェクト実践研究校】

埼玉県立小川高校	46
埼玉県立庄和高校	49
埼玉県立鳩山高校	52
埼玉県立吉川美南高校	54
埼玉県立越谷西特別支援学校	55

【地域課題探究型学習モデル事業】

埼玉県立北本高校	57
埼玉県立越生高校	59

学校地域WIN-WINプロジェクト

WIN
PROJECT
WIN

概要

- 学校以外の人的・物的資源(企業、NPO、市町村、地域人材など)を活用した実社会からの学びを充実する(学校のWIN)
- 学校の力を地域で生かす取組を推進する(地域のWIN)

目的

- 子供たちがより良い社会と幸福な人生の創り手となる力を育む
- 「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント」、「総合的な探究の時間」など、新学習指導要領への対応に備える



取組 1 教育局に窓口を設置し学校と地域をつなぐ

- ・年間を通して地域の力を教育活動に活用する取組や学校の力を地域に生かす取組の提案を学校から募集
- ・学校や地域のニーズに応じて、教育局職員が学校と地域の両者のマッチング・コーディネートを実施

取組 2 県立学校5校で、先行事例を打ち出し事業を牽引する

- ・県立学校(小川高校、庄和高校、鳩山高校、吉川美南高校、越谷西特別支援学校)を実践研究校として指定
- ・学校、地域、県が連携しながら、学校・地域両方がWIN-WINとなるモデルを打ち出す

取組 3 学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラムを開催する

- ・実践研究校の生徒による研究発表
- ・学校職員と企業等との交流の機会を設ける

平成30年度実践研究校

WIN
PROJECT
WIN

埼玉県立小川高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科 生徒数: 590人

教育課程の特色: 少人数制での英語基礎力の養成
: 進学選抜クラスを設置
: リクルートやベネッセと連携

進路: 大学・短大・専門学校等、現役進学率74%以上

小川高校の魅力!

- ① 確かな学力+社会生活力習得を目指した指導
- ② 学習・課外活動・学校行事のバランスのとれた教育
- ③ 進路実現に向けたきめ細やかなサポート体制

アクセス

JR八高線・東武東上線 小川町駅 徒歩3分

埼玉県立庄和高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科 生徒数: 586人

教育課程の特色: 1クラス約33名で、きめ細かな指導
: 1、2年次では、習熟度別授業を実施
: 3年次では、多様な選択科目群を設置

進路: 進学者が8割超え、看護・医療系の進学が増加傾向

庄和高校の魅力!

- ① 多様な進路希望に対応した手厚い指導
- ② 運動部・文化部とも充実
- ③ 小さな成功体験を積み重ね自信が持てる環境

アクセス

東武野田線 南桜井駅 バス5分

埼玉県立鳩山高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科・情報管理科 生徒数: 369人

教育課程の特色: 1年生は少人数学級編成
: 数学・英語は2クラス3展開
: 普通科も「情報処理」を2年次に学習

進路: 進路決定率100% (大学・専門学校・就職等)

鳩山高校の魅力!

- ① 学科を超えた豊かな学び
- ② 地域の発展に貢献するリーダーの育成
- ③ 実習的・実務的・実践的な学習を重視

アクセス

東武東上線 高坂駅 鳩山ニュータウン行バス8分

埼玉県立越谷西特別支援学校



学校基本情報

種別: 知的障害 学部: 小・中・高等部 生徒数: 232人

教育課程の特色: 個別的教育支援計画の作成
: 外部専門家を活用したきめ細かな指導
: タブレット等のICT機器を活用した授業

進路: 一般就労が約2割、福祉施設利用が約8割

越谷西特別支援学校の魅力!

- ① 自立活動を充実し、児童生徒のニーズに応える指導
- ② 小・中・高等部の段階に応じ、一貫性のある指導
- ③ 高等部での現場実習等、ニーズに応じた進路指導

アクセス

東武スカイツリーライン 越谷駅 バス・徒歩20分

埼玉県立吉川美南高等学校



学校基本情報

課程: 全日制・I部定時制 学科: 総合学科 生徒数: 544人

教育課程の特色: 1年次より少人数学級を編成
: 商業系の選択科目を設置
: 英語は少人数、数学は習熟度別授業

進路: 就職から専門学校・大学進学まで多様に対応

吉川美南高校の魅力!

- ① 生徒の可能性を引き出し、伸ばす
- ② アクティブラーニングなどを採り入れた魅力ある授業
- ③ 授業・補習・家庭学習の「学力向上のスパイラル」

アクセス

JR武蔵野線 吉川美南駅 徒歩12分

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立小川高等学校

テーマ 「小川高校『ふるさと創生プロジェクト』」

1 教育効果・目的等

・はじめに

本校が所在する小川町は「武蔵の小京都」と呼ばれている。周囲を緑豊かな外秩父の山々に囲まれ、市街地の中央には槻川が流れる山容水態の明媚な町である。平成26年にユネスコ無形文化遺産として登録された「細川紙」のほか、絹、建具、酒造などの伝統産業が息づく一方で、近年では本田技研工業埼玉製作所の小川エンジン工場が稼働を開始し、世界に向けて最先端の技術供給をなしている。

このような魅力あふれる町と、本年度創立90周年を迎えた伝統校である本校が連携して教育活動に取り組むべく、本年4月から「小川高校『ふるさと創生』プロジェクト」をスタートさせた。

・研究の基本方針

- (1) 生徒が町の様々な主要地域行事に運営側として参加する。
- (2) 生徒に地元の魅力を再発見させるとともに、地域の課題にも関心を持たせ、課題解決について検討させる。
- (3) 事業の中での取り組みは逐一HPに掲載し、地域に発信していく。

・研究の構想

本校の生徒数と小川町の人口の推移は正比例している。過去20年で見ると、生徒数も人口も4分の3まで減少し、この推移に歯止めをかける具体的な要素は今のところない。

そこで、伝統校である本校が地域の中核となって町を盛り立てる、町に盛り立てていただくという関係を構築し、人口減少や文化・伝統の継承などの地域の課題をともに考えていこうと創設したのが「小川高校『ふるさと創生』プロジェクト」である。

これには町の行政との連携が不可欠であるため、小川町と「包括連携協定」を締結し、地域行事等の運営を一緒に行いながら研究を進めていくこととした。

・教育効果

(1) 生徒の意識の変化

地域の人々と協働しながら町の行事に取り組むことにより、生徒に地域への愛着と誇りが生まれ、地域貢献への意欲が向上する。

(2) 生徒の資質の変化

地域行事に企画段階から関わることにより、生徒に課題意識が芽生えるとともに、主体性や探究心が向上する。

(3) 学校教育の在り方の変化

学校と地域がともに生徒を育てていく体制を整備することにより、これからの予測不能な時代に求められる人材育成に向け、より効果的な生きた教材を提供することができる。

・目的

地域創生への積極的な取組によって、生徒の意識や資質を向上させ、一人ひとりに望ましい未来を切り開く力を身に付けさせることが、本研究の目的である。

2 実践内容



「小川高校『ふるさと創生』プロジェクト」全体図

(1) 地域行事の活性化のための活動

地域には様々な魅力的な行事がある。町を活性化するには、それらの行事を町内はもちろん町外にも積極的にアピールし、町に注目を集める必要がある。

例えば、小川町商工会青年部が計画した「スカイランタンの打ち上げ」では、本校生徒が協力することでランタンの数を大幅に増やすことが可能となりマスコミ等にも取り上げられることとなった。

また、毎年の恒例行事である「小川和紙マラソン」では、本年度から司会進行と実況を本校の放送部が担当し、大会全体に若々しい雰囲気が出た。



「スカイランタンの打ち上げ」



「小川和紙マラソン大会」

(2) 地域の課題解決のための活動

地域には、その地域に固有の課題がある。その課題に取り組ませることは、生徒がこれからの未来を切り開く能力を育むことに資するものである。

小川町の伝統工芸は和紙漉きであり町で作られる「細川紙」はユネスコ無形文化遺産である。しかし、これを普及し産業として成立させなければ後継者は育たずやがて伝統的技術は潰えてしまう。そこで本校の書道部は小川町から細川紙を提供していただき、それを使用した作品を「小川町和紙フェスティバル」に出品することから、細川紙の普及に取り組み始めた。

また、高齢化に伴った、「オレオレ詐欺」等の犯罪の増加も地域が抱える課題の一つである。そこで地域に流れる防災防犯無線や青色パトロールカーのアナウンスには放送部の生徒が声を吹き込んだ。機械的な話し方ではなく、孫が祖父母を心配するような言葉遣いにより、町民の注意を引き付けることができている。



「小川和紙フェスティバル」



「小川警察署と協働した防犯意識啓もう活動」

(3) 地域との交流に関する活動

地域との交流は、生徒にとって地域への愛着と理解を深める絶好のきっかけとなる。

小川小学校下里分校は平成23年から廃校となっていたが、今年からカフェとしてオープンした。そのメニューの開発を本校の生活美学部（家庭科部）が中心となって行った。半年間かけて創作した5つの料理は地元食材を使用しており、地域から好評を博している。

また、本校生徒有志30名が地元の小学校と交流を図った。午前中は持久走大会の補助を行い、午後はグループに分かれてそれぞれ授業の手伝いをした。ここで本校生徒と触れ合った小学生たちが、高校生となってこの取組に参加し、保護者となってこの取組を見守るところまで続けていく計画である。



「メニュー開発した分校カフェ」



「小川小学校との交流事業」

その他、「嵐山史跡の博物館ボランティアティーチャー」「介護施設での音楽部出前演奏会」「地元音楽会での司会進行」など、多くの地域行事に関わり、新しい発想と初々しい雰囲気づくりで町の活性化に貢献することができた。

3 実践の成果

(1) 生徒についての成果

プロジェクトにおける様々な経験を通し、参加生徒は地域課題を意識するようになるとともに、主体性や探究心、課題解決に臨む姿勢が身に付いた。

【平成30年度 県立学校ほっとニュース】より 生徒の感想】

試作の段階では、思った通りにメニューが作れず、「現実には甘くないんだ」とか「お店で並ぶような商品はそう簡単には作れないんだ」と知りました。しかし、カフェに実際立ってみて、自分で考えた料理を商品化できたこと、実際にお客様に食べてもらえることが何よりも嬉しかったです。

(2) 学校についての成果

地域行政と組織的につながることで、校内の教育活動においても人的・物的支援を受けることができたとともに、教員にも、学校だけでなく地域全体が学びの場であるという意識が波及している。

【平成30年度 地域と連携した授業】

- ・総合的な学習の時間「くらしと科学」 和紙漉き体験
- ・総合的な学習の時間「総合歴史研究」 小川町の史跡についてのフィールドワーク
- ・選択科目「発達と保育」 小川保育園の幼児との交流

(3) 地域についての成果

高校生が企画段階から参画することで、地域行事に新風を吹き込み、町の内外に、世代を超えて町の魅力をアピールすることができた。

【平成30年度 小川町広報雑誌「おがわ」】

- ・10月号トピック「小川町食の魅力PR事業withおが高生」
- ・11月号トピック「小川和紙フェスティバル開催」

4 課題と今後の展望

(1) 参加生徒数について

現在は一部の生徒による取組となっている。今後は、生徒全員が取り組めるような仕組みを考案していく。

(2) 課題発見について

現在取り扱っている課題は表面的な課題のみである。町の行政との緊密な関係を生かし、生徒にさらに掘り下げた地域課題を発見させ、議論を重ねながら解決策を見出すような取組を加える。次年度は小川町主催「小川町まち・ひと・しごと創生総合戦略推進会議」における「若者未来会議」(年4回)に生徒を派遣し、地域課題についての考えを深めさせる予定である。

(3) 学校の在り方について

町で唯一の高校である本校が、町の中核校としてどう機能していくべきかさらに検討を重ねる。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立庄和高等学校

テーマ 庄和の未来を共に創る「地域創生」物語

1 教育効果・目的等

- ・生徒が主体的に課題を見つけ、解決策を考えることで実社会に役立つ力を育む。
- ・学校外資源を活用することにより、地域との連携を深める。
- ・教員が案を出し生徒を誘導することなく、企画を進めていった。これは担当教員間で共通理解のもと、生徒の主体性・協働性の成長を期待し進めていった。
- ・グループが9班に分かれたため、担当教諭3名を、3班ずつ指導に当てた。もちろん生徒主導で指導に当たった。
- ・中間報告会を数回実施し、担当教諭のほか管理職（校長・教頭）が参観し、各班に質問を浴びせるなどして、疑問を解決する方策を取っていった。

2 実践内容

(1) 活動の流れ

ア 課題の設定

- ・有志参加35名(2年8名、3年27名)が参加し、9班に分かれ活動を実施(4月)。
- ・庄和商工会へ伺い、庄和地区の課題等のレクチャーを受け、意見交換を行う(5月)。
- ・各班がそれぞれ課題を設定し、調査研究に取り組む(6月以降)。

<各班の課題>

- 1班：「庄和地域 DE 庄和高生が農業奉仕」
- 2班：「庄和マップを作ろう！」
- 3班：「事故を減らすためには」
- 4班：「春日部の在来大豆を知ろう!!!」
- 5班：「桜台商店街を活性化させる」
- 6班：「庄和町活性化計画！」
- 7班：「庄和高校文化祭&庄和商店街の発展」
- 8班：「サイクルステーションを作ろう」
- 9班：「庄和を活気づけよう」



庄和商工会との課題共有会

- ・庄和高校生の課題設定のポイント
①南桜井駅前商店街の活性化 ②住みよい街づくり ③庄和の知名度を上げる

イ 中間報告

- ・9班が活動状況を発表し、状況の確認とこれからの活動のヒントとした(7月)。
- ・夏休みの活動計画を立て、中間報告として夏休み中にポスター作成を行う(7月)。
- ・庄和高校文化祭で9班のポスターセッションを行う(9月)。

ウ 成果発表会

- ・教育長、庄和商工会、かすかべ未来研究所へ各班の成果を発表する(11・12月)。

(2) 各班の成果

- ・文化祭で地元商店の出店や商品の販売を行った。《1・7班》
- ・春日部在来大豆の大豆粉を使ったバナナマフィンなどを作成した。《4班》
- ・南桜井駅周辺にある桜台商店街を紹介するためのマップを作成した。《5班》
- ・文化祭で商工会の協力でバザーを実施した。《5班》
- ・各班の成果や庄和地域のことをHPやSNSで発信した。《2・5・9班》



文化祭での出店の様子



春日部在来大豆の大豆粉を使ったバナナマフィン



桜台商店街紹介マップ



文化祭でのバザーの様子



作成したホームページ

3 実践の成果

(1) 実践を通して得られたもの（生徒の感想）

- ・地域の問題点や改善点が見え、仲間と協力しながら考え、行動することができた。他人の意見と自分の意見を共有しながら考えを深めることができた。これから社会に出るにつれて、人と関わる機会や人前で発表する機会が間違いなく増えると思う。その意味でこのプロジェクトに参加して良かった。この経験を将来に生かしたい。
- ・街の人にインタビューしている時、積極的に話しかけることができ、社会性が磨かれたと感じた。また、WIN-WINプロジェクトを通して、普段過ごしている地域のことを見つめ直すことができ、様々な視点も持つことができた。私自身が成長するきっかけとなった。
- ・地域についての関心が高まり、自分の住んでいる地域のことをより深く理解することができた。私はこの春、地域密着型の職場に就職するので、このプロジェクトの経験を生かしていきたい。
- ・春日部在来大豆を調べ、詳しく知ることができたと同時に、地域の皆さまと交流を深めることができてよかった。商品開発では、仲間と考えを出し合い、互いに高めあうことができた。考えたレシピを通じて、大豆を広めることに貢献できれば嬉しい。
- ・WIN-WINプロジェクトを通して、特に印象に残っているのは、私たちのテーマである庄和の商店街についてである。調べるにあたって、地元の人々やお店の人の優しさに触れ、もっともっと商店街のことをいろいろな人に知ってほしいと思った。この活動は後輩にも引き継いでもらいたい。
- ・高校生活の最後に何かボランティアのようなことに参加したいと考えており、このプロジェクトに参加した。お店と交渉をし、準備をすることを初めて一から自分たちで行ったので、相手様に迷惑を掛けてしまったことも多々あった。しかし、今回の経験は、社会に出て会社に勤めると何かしらの部署ではこのような交渉をすると思うので、大人がやっていることとほぼ同じことを自分たちのみでやり遂げることができたのは、とても嬉しく、自信になった。そして、大切な経験をさせてくれたので、交渉をする力（交渉力）を学ぶと同時に、他のことにもチャレンジしたいと強く思った。
- ・問題を見つけるところから、解決のためにどうしたらよいか、他人に話しかけたり、仲間に相談したり、調べてまとめたり、頑張って発表までたどり着けて達成感があってよかった。
- ・サイクルステーションの設置に際して、夏休みに実際に自分たちで空き地を探し、市役所に提案してみたところ、私有地と判明した。先に市役所に行って、民地を教えてもらい、その中から探すのが最適な方法であったと痛感した。でも、自分たちの足で探したことは無駄ではないと感じている。

(2) 学校のメリットや地域のメリット

ア 学校のメリット

- ・様々な課題を解決しようとする中で生徒が成長できた。
- ・生徒も学校も地域を知ることができたことと地域との関係が深まった。

イ 地域のメリット

- ・高校生という若い世代に、地域を知ってもらうことができた。

4 課題と今後の展望

(1) 課題

ア 課題の把握

- ・アンケートや地域への聞き取りなどを実施する場合はある程度の数を実施する必要がある。
- ・生徒自身の思い込みにならない注意が必要。

イ 解決する課題の設定

- ・課題の設定が広くなりすぎると活動の焦点がぼやけてしまう。
- ・「こうすればこうなる」を発想させて、課題解決の手だてを考えさせる。
- ・すべて生徒の意見やアイデアを尊重し探究活動を進めたが、探究する活動内容をもう少し教員が絞って提示するなどの支援をした方がよかったと感じている。

ウ 教員の関わり方

- ・私たち教員も教わったことのない探究活動を実施するにあたって、研修等が必要であったと感じている。生徒にも「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」など、適切な資料等を提供することができず、口頭だけで指導しており、十分な探究活動の支援ができなかったと反省している。この経験を今後につなげ、自発的な研修と教員間の情報・指導共有を大事にしながら、探究活動を進めていきたい。

エ 地域との連携

- ・生徒がもっと積極的に地域と関わる必要がある。高校生が動く地域の方々が親身になって対応してくれる。

(2) 今後の展望

- ・庄和高校では平成30年度より「総合的な探究活動の日」を年5日間（学期末試験後）設定し、学校全体で探究活動に取り組んでいる。WIN-WINプロジェクトも同時並行した。
 - 1 学年のテーマは「埼玉の魅力を発信しよう！」連携先（カタリバ）
 - 2 学年は「国際理解・台湾について現地で検証しよう！」連携先（㈱教育と探究社）
 - 3 学年は「地域創生で地元を活性化しよう！」連携先（かすかべ未来研究所）その中で、グループでの意見をブレインストーミング形式で出し合い、調査研究等を進めた。最後はパソコン台数に制限があるため、紙形式のプレゼン発表を行った。
- ・来年度も引き続き、学校全体で探究活動に取り組んでいく。テーマは学年固定とし、毎年違ったテーマで生徒は探究活動を進めていく予定である。
- ・3 学年では「地域創生」をテーマにしており、WIN-WIN プロジェクトの趣旨も校内で継続できると考えている。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立鳩山高等学校

テーマ ハトミライ☆プロジェクト

1 教育効果・目的等

本校は創立36周年を迎えた普通科・情報管理科の2学科を併設した鳩山町の支援のもとに設立された高校である。地域との連携も以前から進んでおり、小学校との交流事業や地域行事への運営補助や出演、清掃活動等を実施して来た。

平成29年度にこれまで年に2回実施していた福島への「東日本震災復興ボランティア」を年1回とし、その経験を活かして地域の活性化を目指したボランティア活動について生徒会が検討を開始した。当時の生徒会長が地域の超高齢化・人口減少が進む現状から「鳩山町を人のたくさん集まる町にしたい」という思いを抱き、「さくらの名所」にすることを考えた。生徒会本部役員の賛同を得て、11月に鳩山町教育委員会が主催する意見発表会で「ハトミライ☆プロジェクト～30年後に地元鳩山を桜の名所へ～」を提案し、鳩山町の協力をいただきながら、さくらの植樹を実現した。この取組により、生徒は地域の課題を理解するとともに解決するために方策を考え、提案し、実践することにより、自らの成長を実感した。

この様子からこの取組を単年度で終わらせずに継続し、さらに地域の方と協働で連携を広げようと考え、「学校地域WIN-WINプロジェクト」への参加を決定した。多世代の方との交流を通して、困難な課題にも仲間とともに知恵を絞り、解決に向けて進む力を身につけることを目的とする。また、自らが考えたことが実現することにより生徒が自己肯定感を高めることも期待している。

本プロジェクトは、生徒会本部・生徒会部職員が担い、生徒会部主任が中心となり、組織として取り組んでいる。生徒に自分たちで考え、主体的な活動になるよう意識しながら進めて来た。

2 実践内容

(1) ハトミライ☆プロジェクト 2018

鳩山町と共催でふくしまサクラモリプロジェクトから提供を受けた「ふくしまさくら」の植樹を実施した。「はとやま」・「鳩山高校」・「ふくしま」が結びつき、「たくさん笑顔を咲かせたい」、「地域活性化につなげたい」という生徒の思いを実現した。

ア 日時 平成30年3月28日(水) 午前10時～午前11時30分

イ 場所 鳩山町農村公園

ウ 参加者 鳩山町職員・本校生徒・職員・地域住民 計90名

エ 内容

(ア) 趣旨説明

(イ) 記念式典

(ウ) 記念植樹

(エ) 記念撮影

オ その他

広報活動に力を入れ、鳩山町の広報誌「広報はとやま3月号」に掲載するとともに生徒が作成した案内を



〔 さくらの植樹 〕

町内小・中学校の協力を得て、児童・生徒に配布していただいた。缶バッチの作成や風船の配布、鳩山町のゆるキャラ「は〜とん」を招くなど小さな子どもの参加も意識した。

また、客土や掘穴等には鳩山町から御紹介いただいた地域の事業所を利用し、地域とのつながりを重要視した。

なお、ハトミライ☆プロジェクト 2019 については、平成 31 年 3 月 27 日（水）に実施することが決定しており、今年度は、ふくしまサクラモリプロジェクトから提供いただく「ヤマザクラ」9 本を植樹する予定で進めている。

(2) 下草狩り・落ち葉拾い

生徒会がこれまで実施して来た朝の清掃を農村公園まで広げ、定期的に年間を通じて、除草作業や落ち葉の清掃作業を行なった。計画段階で課題としてあげられていた植樹後の管理についても取り組んでいる。

(3) 現地視察・打ち合わせ

ア 第 1 回 打ち合わせ

6 月 11 日（月）、生徒 2 名と職員 2 名とで鳩山町役場政策財政課を訪問し、今年度のハトミライ☆プロジェクトの方向性について協議をした。NPO 法人「里山環境プロジェクト・はとやま」の方から助言をいただきながら、石坂の森を植樹の候補地として決定し、現地視察の日程調整をすることで合意した。また、同法人から生態系を考慮し、さくらの品種は「ヤマザクラ」が適切であるとのアドバイスをいただいた。

イ 第 2 回 打ち合わせ・現地視察

8 月 2 日（木）、生徒 4 名と職員 2 名、鳩山町職員 4 名とが同 NPO 法人の方から「石坂の森」について説明を受けた。また、植樹場所について意見交換をし、多くの方にさくらを見ていただける活動広場と森への入口付近に植える方向で関係団体の許可を得ることとした。また、植樹の日程について候補日を示し、検討依頼をした。夏に石坂の森の下草刈りを予定していたが、暑さのため、計画を中止した。



〔 石坂の森 現地視察 〕

ウ 第 3 回 現地視察（市民の森 モリ×モリウォーキングへの参加）

11 月 17 日（土）、生徒 17 名・職員 3 名が参加し、地域の方とともにイベントへ参加した。森を歩きながらポイントでは木の実やつたなどの森の素材を使用したリース等を製作した。終了後には地域の食材を使用した豚汁・おにぎりをいただき、地域の方との交流を深めた。

翌週、生徒会役員会で情報を整理し、生徒の代表者から鳩山町職員に電話連絡し、植樹の日程等について希望を伝えた。

エ 第 4 回 現地視察

2 月 5 日（火）に生徒 12 名・職員 6 名が参加し、鳩山町職員 4 名、同法人の方とともに実際に植樹する場所を確認した。生徒が持参したスコップで穴を掘ろうとしたところ、歯が立たない状況であった。

また、以前に植樹したヤマザクラがあまり育っていないこともわかった。深くまで掘るために業者に依頼することや生態系を考慮しながら培養土を使用することも検討課題としてあ



〔 モリ×モリウォーキング 現地視察 〕

げられた。また、その費用についても鳩山町と本校とが互いに検討することで終了した。

(4) 広報活動

生徒が植樹の案内の作成や「さくらの名所マップ」に2月現在、取り組んでいる。3月初めに各家庭に配布し、地域の方に配布する予定である。

(5) 植樹以外の新たな取組み

ア オーガニックサラダを楽しむランチ

7月29日(日)に鳩山町コミュニティ・マルシェで実施し、(株)元氣パートナーズの運営補助として、家庭部4名・職員2名が参加をした。地域の野菜を地域の方に知っていただくことや鳩山への就農者への支援を目的として協力をし、生徒が地域を理解し、地域の方と触れあう機会となった。

イ オーガニックコットン栽培

東日本震災復興ボランティアで連携をしている福島県いわき市のNPO法人ザ・ピープルから3月にオーガニックコットンの種を送付いただいた。生徒会で検討し、育てることとした。(株)元氣パートナーズから鳩山町奥田の農地を無償で提供いただき、栽培方法等の助言をいただきながら、5月に種をまき、10月に収穫をした。また、収穫した約10kgのコットンと同法人に届け、福島で有効活用していただくこととした。自分たちの活動が人の役に立っていることを実感するとともに地域の方の協力で実現できたことを強く感じた。なお、この取組は「埼玉県キャリア教育実践アワード2019」で優秀賞をいただいている。

ウ みんなのマルシェ

11月14日(水)、鳩山町コミュニティ・マルシェで本校主催により実施した。県民の日でもある同日に多世代の交流をねらいとして、生徒が企画・運営をした。

家庭部6名はみんなの食堂「スモールピジョン」を営業した。1学期から定食のメニューを考え、試食品を校内で作し、地域で採れた野菜を活用したメニューを考えて、調理・販売した。様々なトラブルに直面し、試行錯誤をしながら接客をした経験や地域の方からの温かいことばをかけていただいたことにより生徒は達成感を得るとともにその後の活動意欲を向上させた。

また、課外授業「キャリア・サポート」選択者6名は、みんなのカフェ「鳩六堂」を営業した。自分の役割を確認しながら何度も本校の教員を対象に校内で模擬実習を重ね、実施の準備をした。緊張をしながらも来客へ対応をし、それぞれが個々に掲げた目標を達成したことにより成長を実感している。

当日は幼児や児童から高齢者まで多世代の地域の方が100名ほど来場し、生徒と交流をしながら飲食を楽しんでいた。

エ 地域連携に関する協定書 締結式

11月22日(木)に鳩山町役場において、「鳩山町・埼玉県立鳩山高等学校 地域連携に関する協定書」を締結した。鳩山町は高齢化が進む中、高校生など若い世代による町の活性化につなげるため、これまでの連携をさらに推進していくことで合意をしている。今後も互いにWIN-WINの関係を築いていくことが確認できた。

3 実践の成果 (植樹後の感想から抜粋)

(1) 生徒の感想から

- ・ 今後も町や地域の人たちと一緒にあって、桜の輪を広げていきたい。
- ・ 地域との直接的な結びつきが弱いと思っていた。福島へのボランティアの経験を活かす

ことができた。

- ・ 桜は形に残る。僕らが最初の未来への架け橋になり、卒業後も鳩高の伝統として後輩に受け継いでいってほしい。
- ・ 今回のプロジェクトとつなげ、町と高校がいっしょになって町づくりを目指していきたい。

(2) 地域の方の感想から

- ・ 鳩山を桜の名所にとというのはありがたい提案。30年後、実現するように望んでいる。
- ・ 鳩山に福島の桜が3本になりました。大きくなってもいつまでも咲き誇り、町の人と福島の人を笑顔にしてくれますように。
- ・ 鳩山と子供たちの成長を祈っています。大きく育ったらこの木の下で花見をしたい。30年後が楽しみです。
- ・ すばらしいイベントですね。10年・100年経ってもこの鳩山が笑顔であってほしい。
- ・ 鳩山のために頑張っている鳩高生に感謝しています。毎年続くことを希望します。

(3) 教職員の感想から

- ・ 生徒が自ら企画したことが形になったことで生徒は達成感を得ることができた。また、掲げたことを実現する困難さを学んだ。一つのことを達成するためには、多くの方に協力をしていただく必要があることや植樹に参加していただいた方のメッセージからそれぞれの人の「想い」を感じることができたと思う。メッセージボードにより「見える化」ができたことも効果的だった。
- ・ 鳩山での体験活動により、地域の課題を身近なものとして捉え、その課題を解決する能力を地域の方に支援いただきながら養うことができると感じる。
- ・ 高齢化率が48%を超える少子高齢化が進む地域をクローズアップすることにより、今後、多くの地域が抱える課題に高校の視点・地域の視点から先進的に取り組むことができ、本校が目指す「実学」につながっている。
- ・ 地域住民と本校の生徒・職員の距離が縮まり、他の教育活動にも波及することが期待できる。

4 課題と今後の展望

(1) 課題

「さくらを植える」と決定してから場所や本数について協議を重ねたが、土地の所有者や環境の問題、植えた後の管理等、取り組み前に考えていた以上に課題が山積した。学校では解決できない課題も多く、鳩山町の御協力があり、実現できた。当初は10本程度を植え、徐々に増やしていき、桜並木にすることを想定していたが、ようやく1本だけではあるが植えることができた。1本でも生徒にとっては大きな1歩だった。

生徒が学校の外部の方と交渉をするのに先立ち、生徒に指導をしなければならないことが多々あった。また、生徒では前に進めることができない場面も多く、教員がどこまで支援すべきか考えながら進めた。さらに生徒の主体性を育てていきたい。

(2) 今後の展開

現在、作成中のマップができ上がったら、動画等でのPR等も含め、本校の活動をさらに多くの方に知っていただきたい。30年後に鳩山がさくらの名所となるようさくらの植樹を地域の活動として定着させたいと考えている。また、今後も生徒がやってみたいと思ったことを実現できるよう教員が支援し、積極的に学校と地域が互いに有益となる活動を推進したい。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立吉川美南高等学校

テーマ 芸術が栄える街づくり～地域と吉川美南高校が奏でる芸術創造～

1 教育効果・目的等

(1) 教育効果・目的

地域の芸術系イベントや街づくりに参加するだけでなく、イベント等の企画・運営までコミットすることにより、異年齢交流（特に大人との交流）を通じた、生徒の認知の多面化や多角化を図ることができる。地域においては、生徒とともに行うフィールドワークを通じて、より良い学校づくりやより良い社会づくりに貢献できる。

(2) 展開方法・具体的な活動

吉川美南高校の生徒会本部と芸術系部活動（吹奏楽部・美術部・書道部・放送部・軽音楽部・創作研究部・家庭科部）が吉川市における芸術系のイベント（ジャズナイト、ロックフェスティバル、吉川市民文化祭、吉川市民まつり、「エフエムこしがや」への出演など）の参加に留まらず、企画・運営にまでコミットする。特に、「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」が示すポイント「駅前ゾーンに文化的施設の誘致を目指し、吉川市の文化芸術拠点とします。」について、吉川市とともに芸術の街づくりに参画する。

(3) 効果を高めるための事前・事後学習の内容

事前学習として、吉川市長を招聘し、芸術の街づくりに関する講演会を行う。事後学習として、参加生徒対象のアンケート調査（事前も実施）を行い、自己肯定感や自己醸成感がどのように変容したかについて分析・評価・改善を行う。

(4) 学校のメリット・地域のメリット

学校としては地域資源の有効活用、地域としては学校づくりや社会づくりへの貢献というメリットがある。

2 実践内容

WIN-WINプロジェクトが発足して間もない5/31(木)、本校の事業に向けて参加者の意識合わせをするため、吉川市長の中原氏を招聘し「スタートアップ講演会」を開催した。その中で、中原市長は「写真部なら写真を撮るのは当たり前。その先で何ができるかを考えてみよう。」とお話しされ、自分の強みや得意をつかって社会貢献することを「もう一歩先へ」というメッセージに乗せて生徒に助言された。地域と吉川美南高校、そして生徒会本部と芸術系部活動の絆を深める効果的な講演会であった。

また、この講演の中で中原市長は、吉川市名産の”なまず”について触れながら、「吉川美南高校も、なまず料理やろうよ！」と発言された。この一言が、後々、新たな取組を生み出すことになる。



中原市長の講演



講演(全景)



中原市長の言葉を受け発言する生徒

ところで、本校の事業は、大きく2つの柱を持つ。それぞれの大柱の中で、以下のとおりいくつかの取組を実施した。

(1) 第1の柱「継続・コミット」

吉川市における芸術系のイベント（ジャズナイト、ロックフェスティバル、吉川市民文

化祭、吉川市民まつり、「エフエムこしがや」への出演など)の参加(継続)にとどまらずに、企画・運営にまでコミット(関与)する。

① 「ジャズナイト」のポスターを制作

美術部は、吉川市商工会青年部の依頼を受けて、9/8(土)に開催された「ジャズナイト」のポスターを制作した。

② 「埼葛人権を考える集い」の大型人権看板のためのポスターを制作

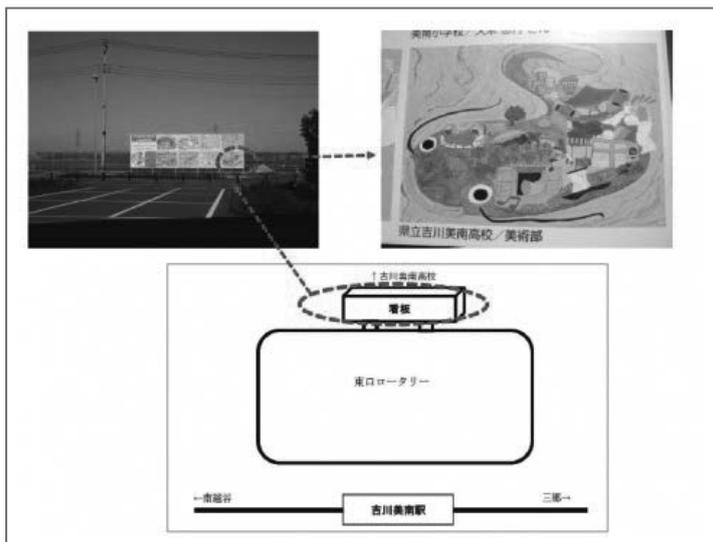
創作研究部が、吉川市教育委員会の依頼を受けて、「第27回埼葛人権を考える集い」の大型人権看板のためのポスターを制作した。このポスターは、10/11(木)に、春日部駅から会場の春日部市民文化会館までの道のりに掲示された。

③ 「まちづくりコンセプト」の看板絵画の制作

美術部が、吉川市(都市整備部吉川美南駅周辺地域整備課)の依頼を受けて、吉川美南駅東口ロータリーの看板に「まちづくりコンセプト」を表現した絵画を提供した。この絵画は、10/26(金)に吉川美南駅東口に設置された。



「ジャズナイト」ポスター(美術部)



「まちづくりコンセプト」看板絵画(美術部)



「人権看板」ポスター(創作研究部)

④ 芸術系部活動が吉川市民文化祭へ参加・出展

11/3(土)・4(日)、芸術系部活動4部(軽音楽部・書道部・美術部・放送部)が吉川市民文化祭に参加・出展した。

開会式前のオープニングでは、軽音楽部が演奏を披露し、会場のシニアの方々に好評を得た。美術部と書道部は作品を展示し、小中学生や家族から称賛を得た。そして、放送部は、ステージ発表の進行を2日間に渡って務め、日頃の練習の成果を発揮した。



オープニング前の演奏(軽音楽部)



作品展示(書道部・美術部)



ステージ進行(放送部)

- ⑤ 放送部・生徒会本部が「吉川市民まつり」に参加
11/18(日)、放送部と生徒会本部が「吉川市民まつり」に参加した。吉川市の行事においては、放送部が司会進行を務めることは定番となっている。

一方、生徒会本部は、吉川ロータリークラブの支援により韓国へ短期留学する生徒とともに、同クラブの指導のもと、募金活動の募金と焼きそば販売をして得た売り上げを、同クラブを通じてポリオ撲滅に寄付をした。



ポリオ撲滅キャンペーン(生徒会)

(2) 第2の柱「創造・チャレンジ」

「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」が示すポイント「駅前ゾーンに文化的施設の誘致を目指し、吉川市の文化芸術拠点とします。」について、吉川市とともに芸術の街の創造にチャレンジする。

① 「なまず料理教室 in 吉川美南高校」の開催

10/2(火)に、「なまず料理教室 in 吉川美南高校」を開催した。これは、当初計画にはなかったが、スタートアップ講演会における中原市長の発言を受けて企画・実施した。

WIN-WINプロジェクトのような実践型の取組には、学習のPDCAサイクルをクルクル廻しながら、「走りながら考える」・「評価・改善を加えながら計画すら見直す」という視点を持ち、学びの質をブラッシュアップしていくことが大切である。



なまず料理教室(家庭科部)

ところで、吉川市名産「なまず料理」と言えば、食文化、つまり芸術である。これは第2の柱「創造・チャレンジ」にマッチした食文化という芸術創造の取組である。

ここで、当日の校長挨拶を掲載する。

今回の取組には、本当に大勢の方がかかわっています。
まず、埼玉県教育委員会は「学校地域WIN-WINプロジェクト」の主催者です。
そして、今回は、吉川美南高校家庭科部がWIN-WINデビューします。
吉川美南高校のパートナーは吉川市です。今日は、吉川市の中原市長もいらしています。中原市長の一言が、この料理教室の開催につながりました。
なまず料理の指導者は吉川ロータリークラブがご紹介くださいました、吉川市内の萬万亭とフードカフェレガメの料理人さんです。
また、本日は、本校のPTA・後援会の合同研修会も兼ねています。保護者の方々も参加されているのはそういう理由からです。
なまず料理のアドバイスをくださった北谷小学校の校長先生も参加されています。
本校にとっては、このような大勢の地域の教育力を得られるとともに、吉川市にとっては、なまず料理のPRや高校生地域の活躍を得られる、まさにWIN-WINの取組になればと思っています。

② 高校生アイデア創出会議の開催

10/23(火)、「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」を踏まえて「高校生によるアイデア創出会議」を実施した。

各グループが発想支援ソフト「IdeaFlagment2」を使用し、パソコン上でアイデアを出し合いながらグループ化し、さらなるアイデアを融合・創造した。

各グループからは「まずは安心安全な街づくりが必要」、「老人の憩いの場が必要」、「運動や娯楽でお腹を空かせて飲食店に呼び込むストーリー」、



高校生によるアイデア創出会議

「お城を建ててそのコンセプトに沿った街づくり」など、若者らしい柔軟な発想がたくさん飛び出した。

最後に、各グループが発表を行い、吉川市役所担当課からアドバイスをいただいた。生徒からは「皆で意見を出し合えば、自分が考えられないこともたくさん考えられることがわかった。」「断片化されたアイデアをもっと関連性を考えてつなげればよかった。」「時間が制限された中でたくさんのアイデアを出すことは大変だった。」「パソコン上で意見を出し合う方法は新鮮で楽しかった。」などの感想が聞かれた。

3 実践の成果

(1) 「事前・事後アンケート」から

スタートアップ講演会（5/31・木）を受講した生徒に対して、取組前（6月）と取組後（翌1月）にアンケートを実施した。

回答した41名のうち、設問「吉川美南駅東口周辺地区土地地区画整理事業についてどれくらい知っているか」について31ポイント、「整理事業が示すポイント『駅前ゾーンを文化芸術拠点とします』についてどれくらい知っているか」について43ポイントの上昇（4点法で回答）があった。一方、「地域交流に興味があるか」や「本取組みに興味があるか」、「本取組みへの貢献意欲はあるか」については、有意な増減は見られなかった。今後、生徒の本取組みへの興味・関心をリサーチしながら、取組内容を精査する必要がある。

(2) 「学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラム」から



小松教育長(左)と語り合う本校生徒(右)

1/15（火）に開催されたフォーラムに、生徒会本部役員6名と放送部2名が出席した。

全員参加グループディスカッションでは、同じテーマを掲げる人がグループをつくり対話を行う取組において、本校生徒会副会長が小松教育長と同じグループになり、「学校を変える」というテーマで熱く語り合った。

参加した生徒からは、「声をかけてもらうのを待つのではなく、自分で企画を作ろうと考えた。なぜなら、様々な方からいろいろ意見を聞き、自分の価値観が変わったから。」「自分の伝えたいことを皆に知ってもらうには、興味を持ってもらうことが大切だ。なぜなら、好きになると没頭できるから。」などの感想が寄せられた。

4 課題と今後の展望

(1) 第1の柱「継続・コミット」

第1の柱「継続・コミット」は、芸術系の部活動の取組としてルーティン化されつつある。今後は取り組み姿勢を参加型から企画・運営型へとコミットの強化・進化を図りたい。

(2) 第2の柱「創造・チャレンジ」。

第2の柱「創造・チャレンジ」は、まだ緒に就いたばかりの取組である。

前述のとおり、吉川美南駅東口の開発については、高校生によるアイデア創出会議（10/23・火）を行った。今後はそこで出されたアイデアのさらなるブラッシュアップを図るとともに、「吉川美南駅東口周辺地区土地地区画整理事業」担当課とも連携を図りながら、同課主催「吉川美南駅東口周辺地区近隣公園ワークショップ」（2月～6月の計5回、吉川市在住・在勤・在学の方約25名参加）へ本校生徒に参加してもらう予定である。

また、本取組を「総合的な探究の時間」の教材として利活用する研究を進めたい。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立越谷西特別支援学校

テーマ ICTでつなぐ地域きずなプロジェクト

1 教育効果・目的等

知的障害のある本校の生徒にとって、パソコンがより簡易に操作でき、仕上がりの差異が少なくなるようなソフトの開発・活用をした取組である。本校の生徒用パソコンには、ワープロ機能のあるものが入っていない。また、市販のソフトでは入力や操作が難しいということがある。このソフトの使用を通して、実際の取組の中で技術を身につけ、社会の中で役立つことを体験的に学ぶ機会となるように考えた。また、連携校である越谷総合技術高等学校と日本工業大学にとっては、技術開発や社会貢献について学ぶ機会として取り組んだ。

体の動きを学習するソフトは、楽しみながら学習を進める教材として活用すると共に、連携校でのソフトの開発・改良への情報提供の機会として取り組んだ。

2 実践内容

(1) ソフト開発に向けて

始めに、顔合わせを兼ねたプロジェクトの趣旨確認を行った。開発・改良にあたり、プロジェクトの担当教員以外の声を仕様に取り入れた。連携校である越谷総合技術高等学校と日本工業大学は、本校の機材や環境などを考慮して開発・改良に取り組んだ。



〔機材の状況確認〕



〔打ち合わせと仕様の確認〕

(2) ラベル作成ソフト

文化祭の製品頒布で使用するラベルシールや商品ポップを作成するためのソフトである。これまでは、1つずつ手作業で小さなものから大きなものまで作成していたが、作成数も多く準備に時間がかかり製品の作成に集中する時間が少なくなっていた。その解決を図る仕様とした。試作品は、本校のパソコンでの動作確認や調整を綿密に行った。本校の環境と開発する連携校の環境との違いが大きく、作成は大変な苦労がありかなりの時間をかけて調整していただいた。



〔シンプルでわかりやすいデザイン〕



〔出力位置の調整〕

ソフトは、生徒が使い方をすぐに覚えられた。一人で扱うことができる生徒も多く、注文に応じて画像を探すなどして、自分でデザインを考えオリジナリティあるものを作ることができ、一人一人が達成感を味わえた。注文をした側からも仕上がりに満足し、取り組みやすかったという声が出された。



〔作成の様子〕



〔納品の様子〕



〔活用の様子〕



(3) 名刺作成ソフト

トレーニングモードでタイピング練習もできる仕様のため、パソコンを使った作業学習を続けることができている。



〔作成の様子〕

〔名刺の完成品例〕



このソフトを使用して、地域での「名刺作成サービス」の出店を行った。社会の中で、接遇、作成、納品まで生徒が分担して取り組み、良い経験ができた。出店時には、全校で協力して生徒の支援にあたった。

〔越谷総合技術高等学校の文化祭への出店の様子〕



〔越谷市民まつりへの出店の様子〕



〔県庁オープンデーへの出店の様子〕



(4) フィジカルトレーニングシステムソフト

体の動きの学習システムとして、日本工業大学から機器やソフトをお借りして取り組んでいる。動かす部位を任意に設定できるので、取り組みたい動きや取り組む人の課題に合わせて調整ができる。また、理学療法士から助言をいただき、システム内で評価ができるよう機能やモードを追加する等を進めている。

さらに、このシステムは本校の作業学習の外部活動において、老人ホームの利用者様とのコミュニケーションツールとして、レクリエーション活動での利用も進めている。



〔改良にむけての検証の様子〕



〔取組画面例〕

〔取組の様子〕



Kinect センサー
このカメラで動きを
キャッチします

(5) フォーラムの様子

本校で作成した名刺を使用し、名刺交換会が行われたことで、自分たちが携わったものがどのように活用されるのかを体感する機会にもなった。同年代の生徒と接する機会をもてたことも良い経験となった。



〔名刺交換会の様子〕



3 実践の成果

違う視点からの教材提供が、子供たちの活動や取組の幅を広げることになった。また、地域や同年代と交流することができ、互いの理解を深めることもできた。本校の生徒は、自分の力で名刺を作成することができ、自信が持てるようになった。名刺作成は、地域から御注文をいただき、さらに経験の幅が広がっている。また、連携校である越谷総合技術高等学校と日本工業大学にとっては、ソフトの開発、試用、改善をとおしてスキル向上や社会のニーズに応えるという経験につながられた。

なお、このつながりをきっかけに、日本工業大学の他研究室との連携も始めることになった。

4 課題と今後の展望

名刺作成やラベル作成のソフトは、本校に現在ある機材で調整をしているため、今後その機材の故障や変更がある場合には、その都度の調整が必要となる。そのため、連携校において、担当者が異動になっても継続してサポートいただけるように、人とのつながりを大切にしていく必要がある。

学校地域WIN-WINプロジェクト フォーラムについて

【主旨】

- ・実践研究校の取組の成果の普及
- ・学校職員と企業・NPO等の方との交流
- ・大人たちがそれぞれの立場で何ができるかを考える機会

【参加者：約230名】

実践研究校の生徒、県立学校の教職員、島根県教育委員会・同県立学校の生徒、企業、NPOなど

平成31年

1月15日（火） 13:00～

会場：埼玉県県民健康センター
大ホール 会議室A・B

学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラム

1 開会

○挨拶

埼玉県教育委員会教育長 小松 弥生

2【第Ⅰ部】全員参加グループセッション（13:05～）

○小グループ（10人程度）で生徒と大人が協議します

〈参加者〉約230人

生徒・・・県立小川高等学校・県立庄和高等学校・県立鳩山高等学校・県立吉川美南高等学校
県立越谷西特別支援学校・島根県立隠岐島前高等学校・島根県立津和野高等学校

関係者・・・県立学校教職員、自治体職員、企業 等

ファシリテーター 豊田 庄吾 氏

（隠岐國学習センター センター長）

福岡県大牟田市出身。大手情報出版会社を経て、人材育成会社にて大手企業・中央省庁の研修講師を務める。また、経済産業省の起業家教育促進事業で、全国300校以上の公立学校にて起業家精神育成の授業実績あり。2009年11月海士町（あまちょう）に移住。高校魅力化プロジェクトに参画し、高校連携型公立塾、隠岐國学習センターを立ち上げ、現在同センター、センター長。学校と地域が一体となった人づくりの実践者として、奔走中。島根県社会教育委員。総務省地域力創造アドバイザー。

3【第Ⅱ部】社会に開かれた学校に向けてのパネルディスカッション（15:45～）

○現場の教員が実践をもとに「開かれた学校」についてアイデアを出し合います

〈ファシリテーター〉高校教育指導課 教育指導幹 石川 薫

〈パネラー〉小川高校教員・庄和高校教員・鳩山高校教員・吉川美南高校校長・越谷西特別支援学校教員
島根県立隠岐島前高校教員

4【第Ⅲ部】交流会（16:35～）

※参加費200円

○リラックスしながらの交流・名刺交換を行います

〈参加者〉生徒、県立学校教職員、自治体職員、企業 等

5 閉会

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト フォーラム

教育長挨拶（要旨）

- 多くの皆様のご出席のもと、フォーラムが開催できますことに感謝申し上げます。
- 身近な地域にある課題の解決に向けて、生徒たちが解決に向けて様々な考え、考えた解決方法が実行されることは素晴らしいことだと思います。
- このWIN-WINプロジェクトは、生徒たちが考え、行動したことが「実社会で役に立った」という体験が、地域の様々な場所で起こることを願って始めた取組です。このような取組はこれからの学校づくりにとっても、地域や企業の皆様にとっても良い取組になると考えています。
- 本日のフォーラムでは、全員参加のグループセッションを行います。島根県の隠岐國学習センター長である、豊田 庄吾 様にファシリテーターを務めていただき、初対面の様々な立場の方々と語り合ってください。
- これからの少子高齢化の時代、地域創生が求められている時代に、よりよい教育環境を準備しなければならない大人たち一人一人が、それぞれの立場で、何を考え、どのように行動していく必要があるのかについて、考える機会になればと考えています。
- 今日のフォーラムが、皆様にとりまして新たな出会いの場となり、また、次の楽しいことを考え出すきっかけとなることを願っています。



【第1部】全員参加グループセッション

- ファシリテーター 豊田 庄吾 氏（隠岐國学習センター センター長）
- 活発な意見交換を促すため、1グループ約10人。椅子を円状に並べる。
- 生徒1～2名と、多様な職種の大人がミックスされたグループを事前に構成。

豊田氏：「探究的な学び」の意義や価値を一人一人が理解し、自分の立場で、今後何ができるのかを考えることが今日の目的になります。



【チェックイン】8分

- 「いい教育とはどんな教育か」について、自分の考えをA4の紙に書く。
- 自己紹介と書いた内容をグループ内で一人ずつ述べていく。
- グループ内での仕切り役を決める。

豊田氏：今日、大事にしていきたいスタンスは、主体的（「自分たちでつくる」当事者意識、不便を愉しむなど）・対話的（安全安心、自己開示、傾聴、問い、違いを愉しむ、手放すなど）・深い学び（オープン&フラット、内省、省察、メタ認知、挑戦・失敗、遊びなど）です。

学びの責任はだれにあるのでしょうか。先生か、自分か、どちらにもあるのか。子供たちにこの質問をすると、8割の子供は「どちらにもある」と答えます。

私は、最近、学びの責任は生徒（学ぶ人自身）にあると考えています。大人が何かを学ぶ時、先生はいませんね。学ぶ力は急に身につくものではなく、自分自身で学びを捜しに行ったり、学びをつくったりしながら、不便を楽しむことで学ぶ力が育まれます。

便利は依存を生みますが、不便は自立や知恵、協働などを生み出します。不便の方が頑張れます。今日は皆さんで学びをつくっていきましょう。いろいろな立場の方が参加しているので、いろいろな方々との対話を楽しんでください。

【セッション1】25分

- 実践研究校と島根県の生徒が取組の説明（取組の概要、何を学んだか、どんな変化を感じているか、どう成長したか、など）
- 生徒の取組を基に対話（生徒が語った内容について、意見を交換させる中で学びを深める。）
- 対話後、次のセッション2に向けての改善策等を話し合う。



【セッション2】25分

- 大人だけが場を移動する。
- 新しくできたグループで、セッション1と同じように生徒が取組を説明し、セッション1の内容を踏まえながら、新たな対話を行う。



【休憩】10分

- ※休憩後、第2部パネルディスカッションを実施し、その後、セッション3を実施

【セッション3：マグネットカフェ】25分

- セッション1・2を通して、自分が話したいテーマ（問い）を考え用紙に記入し、テーマが似ている人同士、直感でこの人と話したいと思った人同士で集まってグループを作り、対話する。※話しやすい環境は自分たちでつくる。

【セッション4：学びのシェア】15分

- セッション1のグループに戻り、今日の学びと、「楽しく・労力がかからない、リスクが少ない、3日以内に実行できる『小さな一歩』」（今日の学びを活かし自分が取り組みそうなこと）を用紙に記入し、シェアする。



【参加者より（代表）】

教 諭：特別支援学校でどう地域連携ができるかを考えています。今日のフォーラムで挑戦する決意ができました。

生 徒：生徒と地域は関われるのかと思っていましたが、部活動を通じてできるんだと感じました。大人の方と話して、他にもこういうやり方があるんだと、今まで考えつかなかったアイデアがもらえました。

【まとめ】

豊田氏：変化するときは、変化する前の状態を否定しないことが大切です。変化は途切れているものではなく、つながっているものだからです。探究的な学習は、行動・実践することで身に付きます。我々大人が実践していくことがこれからの学校づくりにつながっていきます。

【第2部】社会に開かれた学校に向けてのパネルディスカッション

□ファシリテーター 石川 薫（高校教育指導課 教育指導幹）

□パネラー 谷野 浩人（小川高校 教諭）

奥井 亘（庄和高校 教諭）

鈴木 聡（鳩山高校 教諭）

内田 靖（吉川美南高校 校長）

神野竜太郎（越谷西特別支援学校 教諭）

岡本 敏明（島根県立隠岐島前高校 主幹教諭）



石川：小川高校は地域の様々な行事に企画の段階から参画しています。御苦労されたことは何ですか。

谷野：音楽部・バレ一部・放送部などの町と連携する活動では、町のそれぞれの課で依頼を受けて実施していました。これを取りまとめて、学校として取り組むこととなりました。イベントだと土日の活動が多くなり、部活動や学業との兼ね合いがあります。

石川：工夫された点は何ですか。

谷野：7月に小川町と小川高校で包括連携協定を結びました。

石川：庄和高校は、商工会と連携し商店街の活性化に取り組みました。悩んだ点は何ですか。

奥井：生徒との距離感、関わり方に課題が残りました。課題の設定など、生徒にどのように指導したら良いのか、教員としてのスキルなどに悩みました。

石川：取り組む上で先生方が意識していた点は何ですか。

- 奥井：生徒の主体性に重点に置くことです。夏休み前に中間発表を行い、計画を立てました。生徒が動く地域は協力してくれます。生徒を信じて任せてみることも大切です。
- 石川：鳩山高校は生徒会を中心に桜で有名な町にしたいと取り組んでいます。大変なことは何ですか。
- 鈴木：桜並木をつくって人が集まる町にしたいと考えました。生徒と町との関係性をどのようにつくるのが大変でした。桜の植樹となると学校の考えだけでなく、場所や管理の問題で行政上の課題が生じました。
- 石川：先生方が工夫した点は何ですか。
- 鈴木：広報活動を重点的に行いました。今後、工夫できる点としては、地元の大学・小学校・中学校にも呼びかけをして、高校発信で広めていきたいです。
- 石川：越谷西特別支援学校は、日本工業大学と越谷総合技術高校と連携し、名刺作成や運動支援のソフトを開発しました。生徒が生き生きとしている点が印象的です。生徒の様子などを教えてください。
- 神野：イベントなどで名刺を作成する中で、お客さんの「ありがとう」という言葉に生徒の笑顔が見られました。授業と社会とのつながりを肌で感じることができました。
- 石川：若い先生が中心になって取り組んでいる点についてどうですか。
- 神野：管理職や先輩に相談にのってもらっています。自分たちが何をしたいのか、何をやっているのかを学校の先生方に知ってもらい、協力を得ることができました。
- 石川：吉川美南高校では、市と連携して生徒たちが町づくりに参画しています。なぜこの事業に取り組もうと思ったのですか。どのように進められましたか。
- 内田：「よりよい学校教育を通じたよりよい社会づくり」、「社会に開かれた教育課程」というテーマに向かう上で、地域に打って出なければと思い取り組みました。
- 石川：新しい取組に対してどのように対処されましたか。
- 内田：教員の負担は減らすように打ち出しました。土日の出張はできる限り代表で対応し、学校説明会の回数も減らしました。朝会は1分で終了し、先生は早く教室に行って生徒と対話する時間を確保しました。
- 石川：島根県立隠岐島前高校の取組で大切にしていることは何ですか。
- 岡本：一人でやらない、チームで行うことです。生徒の変容を実感できるようにしています。
- 石川：うまく進む秘訣は何ですか。
- 岡本：隠岐島前高校は、成功事例ではなく挑戦事例です。生徒、教員とも振り返りを重要視しています。しかし、ややもすると積上げ式になり、負担増となってしまいます。職員会議を工夫し対話時間を設定し、当事者意識を高めています。一人ではなく、チームで生徒に伴走しています。
- 石川：開かれた学校づくりは、様々な立場の方たちが、お互いの力を発揮して課題解決に取り組むことが大切です。そのことは、生徒の成長を促し、より良い社会づくりにもつながっていくのではないのでしょうか。

【第3部】交流・名刺交換

- 約160名の参加者のもと、新たな出会いや、共通の課題などを語り合う場をして実施。
- 生徒の名刺については、県立越谷西特別支援学校の生徒が作成。



**平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト フォーラム
【アンケート集計】**

※は複数回答可

● 学校地域 WIN-WIN プロジェクトフォーラムに参加したきっかけは。※

学校と地域・企業の連携に関心がある	75%
実践研究校の取組を知りたい	35%
島根県の取組に関心がある	19%
ファシリテーターの豊田氏の話が聞きたい	15%
ディスカッションが楽しみ	8%

● 学校地域 WIN-WIN プロジェクトフォーラムに、どんなことを期待して参加しましたか。※

学校と地域・企業の連携のノウハウを学びたい	80%
島根県の取組を知りたい	22%
ディスカッションでの学び	23%
人脈づくり	20%

● ディスカッション中心のフォーラムに参加したことがありますか。

ある	15%
ない	85%

● どのようなことを交流会に期待していますか。(交流会に参加する方へのご質問) ※

異業種の方とのつながり	50%
同業種の方とのつながり	24%
島根県の方との人脈	14%
実践を積んだ生徒との交流	33%

【良かった点・改善点・ご意見等】 ※原文のまま掲載しております。

□ 良かった点

- ・参加者が主体的に学べる。豊田氏の講義（進行の仕方）
- ・発表校の具体的な実践を深く知る事が出来て良かった。
- ・様々な方の意見が聞けて参考になりました。(多数)
- ・色々な立場の方との交流ができたこと。(多数)
- ・立場混在でのディスカッションはとても新鮮でした。
- ・参加者全員が考えや意見を言い、対話的な会議となった点。
- ・参加者が積極的で話が尽きなかった。
- ・生徒の成長する姿を実際に見ることができた。
- ・限りなく保守化していく自分への反省となった。
- ・生徒の良い発表の場となっていた。
- ・生徒の成長の生の声が貴重である。
- ・高校生の率直な話が聞けて参考になりました。(多数)
- ・参加者一人一人が参加することに責任を持てた点。
- ・一方通行でない点。
- ・主体的に考えようとする気持ちが盛り上がる感じがする。
- ・実際に参加した高校生の表情が大変良く、取組後の満足感を見ることができました。

□ 改善点

- ・グループセッション、パネルディスカッションの全体的な流れとともに、少し詳しい項目立てを事前に示して欲しかった。
- ・参加者が多く、会場が狭かった。(良い意味で)
- ・プロジェクト自体のそもそものテーマなどの深いところの話が聞きたいと思いました。
- ・生徒にはテーマが少し難しかったと思う点。
- ・グループの人数をもう少し減らしたい。
- ・研究結果の報告会なのか、活動を通して生徒が何を学べて何が身についたのか、ディスカッションの内容、方向性が曖昧になり、まとまった話し合いになっていなかった。
- ・高校生が入る場面も必要だが、生徒は別のセッションがあった方が良かった。
- ・学校の苦勞が知りたかった。
- ・パネルディスカッションが間に入るとインプットが長くなり、雰囲気、場づくりの観点で課題が残ったように感じた。

□ ご意見等

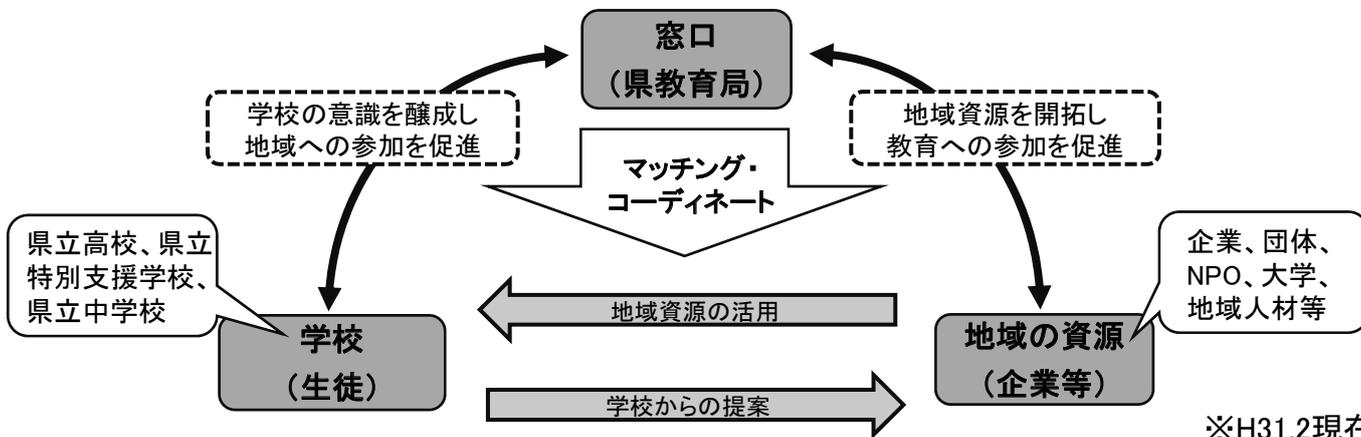
- ・大変楽しい研修でした。定期的に研修を続けてもらいたいです。
- ・大変貴重な機会をありがとうございました。より多くの人に、直接参加し、実感して頂きたいです。継続頂けますことをお願い申し上げます。
- ・高校生と共に学ぶ機会は貴重でした。
- ・地域連携の目的・ねらいを意外と多くの現場の方が御存知なかったです。
- ・企業は行政のスピードを理解すべき。点ではなく面での支援を検討する必要あり。
- ・しっかりリフレクションを行い、地域に開かれた学校、地域の期待に応えられる学校づくりの参考とさせていただきます。
- ・参加した高校生がとても成長しているのを肌で感じました。
- ・自校でも地域活性化も含めてやってみたいと思った。
- ・異業種の方々とも交流ができて、とても勉強になりました。
- ・グループセッション及びパネルディスカッションは今後の授業計画を考える上で、大変参考になりました。色々な方の生の声やアドバイス、意見を受けて大変刺激になりました。
- ・3つの別のグループのしかも生徒のいるディスカッションは初めてで、だんだん慣れるにしたがって雰囲気も良くなってきた。今後も同様の企画があれば良いと思う。
- ・教員、行政、企業、高校生と意見交換ができてとても有意義でした。一部の生徒ではなく、全校生徒に当事者意識を持たせ、「地元愛」を育む地域と連携した探究活動を実現したいです。良い勉強になりました。
- ・高校生が地域に目を向けるというのは果たして本当に生徒が興味を持つのだろうか疑問がありましたが、生徒の前向きな意見が聞けてとても良かったです。放課後や部活等の活動が主になっている印象でした。時間外労働・・・、授業の中で教科を超えた取組があったら聞いてみたいと思いました。参加者人数の多さに驚きました。地域との取組への関心の高さが伺えたことが今回の一番の収穫でした。
- ・豊田ファシリテーターの進行に敬服します。グーチョキパーの話は心に残りました。地域との連携を全体の業務の負担増にならないようにすることが課題です。

教育プログラム

【教育プログラムとは】

- ・学校と地域（企業・NPOなど）が連携・協働する教育活動の手法であり、教育効果、目的、展開方法などを定めたものをいいます。
- ・ご確認いただき、マッチング等ご希望の際は、生涯学習推進課地域連携担当（048-830-6979）までご連絡をお願いします。
なお、教育プログラムは、ホームページ等にも掲載しております。

地域(企業・NPO等)に、学校教育で活用できる教育プログラムを作成してもらい、教育局職員が学校と地域をマッチングする



※H31.2現在

プログラム	「世界のことばで話そう！」～多言語・多文化・多様性を楽しむ！～
内 容	<p>■中、高等学校（45分）の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日のテーマ確認：人間は誰でも、生まれ育つ地域や飛び交っている環境のどんな言語でも、自然に習得できる、話せるようになる。ポイントは聞こえたとおり言語の全体をまねること♪ ・世界のことばでご挨拶：何語でもまねる ・世界の歌でゲームなど全身で楽しもう：音から、何語でも、世界のことが近くなる ・世界の国からタイム：言語交流研究所研究員のホームステイ、ヒッポ高校留学生などのチームに分かれて 体験や言語をシェア (例)メキシコ/ロシア/韓国/台湾/アメリカ/フランス/など <p>学校生活やホストファミリーとコミュニケーションできるようになることを通して、こころを開くこと、相手をうけいれること、何語でも話せるようになることを、体感する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークで学んだことを発表。各グループで楽しんだ言語でご挨拶にもチャレンジ (各グループ1分ぐらい) ・どんな人、どんな言語にも壁をつくらず、まず自分から相手に声をかけ、未来を拓いていこう！のメッセージ ・本日のプログラムの感想シェア ・対応できる言語等：スペイン語・韓国語・英語・日本語・フランス語・中国語・ドイツ語をベース、イタリア語・ロシア語・タイ語・マレーシア語・ポルトガル語・インドネシア語・広東語・アラビア語・ベトナム語など
会 社 名	(一財)言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ

プログラム	英字新聞制作プロジェクト
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ決定 (例：地域紹介、課題研究、学校紹介など) ・役割分担とチーム編成 (5～8程度のチームで、取材、記事作成を行う。) ・取材とその結果の共有 (情報の不足や重複をお互いに指摘する) ・記事作成とその共有 (お互いに内容を確認する) ・紙面レイアウト
会 社 名	一般社団法人グローバル教育情報センター

プログラム	企業経営者との意見交換
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経営者から、社会に出ると言うことは何を意味するか学ぶ。 ・ 経営者と将来の環境変化について意見交換を行う。 ・ 人生100歳の設計を考える。
会 社 名	一般社団法人ディレクトフォース

プログラム	生徒参加のパネルディスカッション
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ パネリストになる高校生と面談して知識と進め方を事前に検討。 ・ パネルディスカッションは基調講演20分、壇上のパネリスト生徒との討議30分。 ・ 会場全体講義40分まとめ10分。 ・ 上記および振り返りシートへの記入により、社会には一つの正解はない、主体的に発言することの大切さを実感する。
会 社 名	一般社団法人ディレクトフォース

プログラム	ワクワクゆめ教室～クラスのチーム力で夢発見&夢発表
内 容	<p>■授業概要：ゲームやワークを通して、楽しみながら夢を発見し、クラス全員で発表し合うワークショップ型の授業</p> <p>■講師：協会認定講師が担当</p> <p>■プログラムの流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 導入：講師自己紹介、授業のオリエンテーションを行う。 ・ アイスブレイク：身体を動かし、心と体をリラックスさせ、発想しやすい状況にする。 ・ GOOD!CLAP!SMILE!：イイネと拍手と笑顔で承認し合う雰囲気をつくる。 ・ 夢発見プログラム：ゲームやアクティビティを実施し、夢の種となるキーワードを書き出し、夢を見つけ、ひとつに絞った夢を具体的にイメージしカードに記入する。 ・ 夢発表&ワクワクツリー作成：夢を書いたカードを持ってクラス全員の前で自分の夢とその理由を発表する。発表後、ワクワクツリーに夢カードを貼り付け、授業終了後もクラスに掲示し、お互いの夢を継続的に意識しあえるようにする。 ・ まとめ&夢コイン授与：夢発見&夢発表への承認。夢を叶えるために大切なことを伝える。夢発見の証とアンカーとして夢コインを贈呈する。
会 社 名	一般社団法人 日本ゆめ教育協会

プログラム	PROMISE 金融経済教育セミナー
内 容	<p>■対象：高校・専門学校・大学(短期大学含む)・保護者</p> <p>■プログラムはご要望に応じ組み合わせが可能。</p> <p>■プログラム①「生活設計・家計管理」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークを通じ長期的なライフプランや家計管理を学習。 ・ 夢や目標の実現に向けて、ライフプランニングの必要性や日々の家計管理を行う際のポイントを紹介。 <p>■プログラム②「ローン・クレジット」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 商品の仕組みや契約にあたっての基本姿勢を学ぶ。 ・ ローンやクレジットを利用する際のポイントやリスクを伝える。 <p>■プログラム③「金融トラブル」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「カードトラブル」や「インターネットトラブル」といったトラブル事例や対策方法、情報の確認方法を学ぶ。 ・ 悪質業者の手口は日々巧妙化している。その備えとして具体事例を踏まえた情報や対策方法について紹介。
会 社 名	SMBCコンシューマーファイナンス株式会社

プログラム	勤労観・職業観ワークショップ
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・1コマ目：社会の変化と仕事の変化について理解する。 グループワークで新しい仕事を想像、話し合い、発表する。 ・2コマ目：働き方の違い（正規社員、非正規社員、起業）について理解する。 厚労省のデータを使い、フリーターと正社員の違いについて学ぶ。
会 社 名	NPO法人16歳の仕事塾
プログラム	社会人基礎力ワークショップ
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ今、社会人基礎力が求められるか。 ・1回目：「紙タワー」グループワーク ・アセスメントを用い、社会人基礎力の自己診断をする。 ・2回目：「紙タワー」グループワーク
会 社 名	NPO法人16歳の仕事塾
プログラム	職業人へのインタビューワークショップ
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・職業人とファシリテーターの2人がペアとなって進行。 ・1コマ目：職業人の話しを聞く。ファシリテーターからインタビューの仕方を学ぶ。 ・2コマ目：生徒がグループになって、職業人にインタビューする。 ・ファシリテーターはクラス全体の進行、場づくりをする。
会 社 名	NPO法人16歳の仕事塾
プログラム	チームコンセンサス・ワークショップ
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ボートで漂流中、どの道具をどう使うか優先順位を個人で考え決める。 ・チームで話し合い、合意形成を図り、チームとしての順位付けをする。 ・専門家による正解との誤差を出す。 ・少数意見を大切に話し合いができたかどうかなどが、点数で表される。
会 社 名	NPO法人16歳の仕事塾
プログラム	夏休み・プレゼンテーションプログラム
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人や大学生向けの「プレゼンテーション基礎」を学ぶ。 ・「チームビルディング」のワークを体験し、良いチーム作りについて理解する。 ・チームで話し合い、納得解を得てプレゼン資料（パワーポイント）を作成する。 ・クラスでの予選プレゼンを経て、ファイナルプレゼンで最優秀チームを選出決定。
会 社 名	NPO法人16歳の仕事塾
プログラム	表現を通じて学ぶ、異文化理解・多様性「世界のダンス教室」
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の各地のダンス(アフリカ/ヨーロッパ/アジア/アメリカ等)の体験,創作 ・その地域ごとの文化学習 ・発表 <p style="text-align: right;">※人数規模・時間数によってアレンジが可能</p>
会 社 名	NPO法人コモンビート

プログラム	企業経営者との意見交換
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経営者から、創業時の思い出、経営理念、エピソード、成果を出し続ける工夫等を学ぶ。 ・ 経営者と社会貢献や人材育成等について意見交換を行う。
会 社 名	株式会社アドバンスサービス

プログラム	「一生使える探究のコツ」
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践の手引き〈基礎編〉 探究活動の流れを辿れる、導入編教材。 最終的に、高学年で自ら問いや課題を設定する探究活動に臨むために、その前段階までを段階的にサポート。 ・ 思考の手引き 探究の質を上げるための思考力（論理的・批判的思考、仮説思考）を鍛える教材。
会 社 名	株式会社トモノカイ

プログラム	“届けよう、服のチカラ” プロジェクト
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ ユニクロ・ジーユーによる「全商品リサイクル活動」（着なくなった衣料を回収し国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の協力を得て難民キャンプに寄贈する活動）を、教育機関向けに拡大した学習支援プログラムが、“届けよう、服のチカラ”プロジェクト。 ・ 回収する衣料は「子ども服（ベビーから160センチまで）」になりますので、児童生徒が地域とつながるきっかけを作るとともに、回収方法や呼びかけなどを考え、行動することで国際的な貢献活動を体験。 <ol style="list-style-type: none"> ①出張授業： ユニクロ・ジーユー社員が学校を訪問。“服”がテーマの出張授業。 ②校内・地域へ呼びかけ： 校内や地域に呼びかける方法を、子どもたち自身が考え、実践。 ③回収・発送： 実際に服を回収したのち、指定の倉庫に発送。 ④報告： 難民キャンプへの寄贈の様子を、ユニクロ・ジーユーからフォトレポートで報告。
会 社 名	株式会社ファーストリテイリング（ユニクロ・ジーユー）

プログラム	埼玉県生徒とタイアップした商品開発（包括的連携協定10周年記念）
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 商品企画・商品仕様・パッケージ作成・店頭販売までを体験。 ・ 株式会社ローソンの概要・販売戦略・マナー、サービス等についての講話（要相談）。 ・ 商品開発企画書の作成（グループ単位等）→商品のプレゼンテーション（10分・試作品の提供可）→選考された商品（1品）をメーカーで商品化（試作→検討→修正の繰り返し）→パッケージデザインの作成（複数の検討会実施）→店舗販売（販売方法の検討）。
会 社 名	株式会社ローソン

プログラム	妊娠・不妊に関する出前講座
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 妊娠・出産・不妊に関する知識について。 ・ 避妊・性感染症・男女の性に対する意識差について など。
会 社 名	埼玉県保健医療部健康長寿課

プログラム	現役社長、または人事部長から学ぶ「おもしろい人生の描き方」（参加型授業）
内 容	<ul style="list-style-type: none"> • お客様が喜び、社員が喜び、社会が喜びという「ALLWIN」という企業理念やホスピタリティを重視した企業の現場が実践している社員教育などを学ぶ。 • 日経ビジネス誌に取り上げられた社会貢献活動や社内のユニークな取組などを学ぶ。 • 人材育成等について意見交換を行う。 • 社会人（働く）に必要な考え方やビジネススキルを学ぶ。
会 社 名	CSリレーションズ株式会社

プログラム	シミズ・オープン・アカデミー 「テクニカルツアー」
内 容	<ul style="list-style-type: none"> • 座学で建設の仕組み、社会の中で建設業が果たす役割を学んだ後、実験施設などを見学し、技術を体感。
会 社 名	清水建設株式会社

プログラム	すぐろくで将来を体験！ライフサイクルゲームⅡ～生涯設計のススメ～
内 容	<ul style="list-style-type: none"> • 「ライフサイクルゲームⅡ～生涯設計のススメ～」実施。 • 若者向けの消費者被害事例を学ぶ。 • 消費者として必要な知識を学ぶ（クーリングオフ、食品ロス、結婚費用など）。 • ライフイベント表から人生設計を考える。
会 社 名	第一生命保険株式会社

プログラム	くすり、製薬会社の仕事について
内 容	<p>糖尿病治療薬を創製した化学と生物の研究者が、くすり創りの仕組みを紹介。</p> <p>化学系</p> <ul style="list-style-type: none"> • くすりとは何か（病気の原因物質に結合し、阻害/活性化する化学物質） • 医薬品の研究開発（医薬品を生み出すには、長い時間と多くのお金が必要） • 特許で守られる新薬（「特許」の切り口から社会の成り立ちを紹介） • 創薬化学の仕事（分子模型を用いて化学構造が持つ働きを考える） <p>生物系</p> <ul style="list-style-type: none"> • 製薬会社の研究職とは（薬学部だけではない・様々な分野の専門家・女性も多い） • 創薬研究から製造承認申請まで（生物系研究者が薬づくりに果たす役割） • 田辺三菱製薬の創薬（新規機序糖尿病治療薬のパイオニア）
会 社 名	田辺三菱製薬株式会社

プログラム	授業支援プログラム ～シェア先生の経済教室～
内 容	<ul style="list-style-type: none"> • 「株式会社の仕組みと証券市場」 <1時限>（50分×1コマ） 【講義形式】 ロールプレイを交えた参加型授業で経済の三主体（政府・企業・家計）や会社の仕組みとその機能について学ぶ。 • 「社会や経済の動きと株価」 <1時限>（50分×1コマ） 【講義形式】 新聞やニュースなどを題材に、社会や経済の動きと企業業績・株価変動の関係について学ぶ。
会 社 名	東京証券取引所

プログラム	授業支援プログラム ～ボードゲーム【ブルサ】～
内 容	<p>ボードゲーム「ブルサ」 <2時限> (50分×2コマ) *基本2時限続けての授業【体験型】教材「ブルサ」を使用</p> <p><導入> 1クラスを4～6人のグループに分ける。</p> <p><展開> 各グループごとにゲームを競う。</p> <p>・ルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ①所持金 200万円 ②ニュースに基づき、次の3社の株式を売買。 <ul style="list-style-type: none"> ・自動車製造の会社 ・小売業の会社 ・衣料品製造小売業の会社 ③5問から10問のニュース。 (授業時間によって設問数は変わる。) ・ヒット商品 景気回復 GDP拡大 円高円安 など ④各ニュースごと 生徒たちは、そのニュースが各会社にどのような影響を与えるか考え株式を売買。 ⑤株価変動の結果を発表しニュースの解説。 ⑥すべてのニュースの後、最終取得金額が一番多い人が優勝
会 社 名	東京証券取引所

プログラム	自己肯定感とコミュニケーション力UPで、生きる力・社会に出て行く力を磨く
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ形式で体感させるのが特徴。生徒同士2人一組ずつで行う。「笑顔で挨拶練習・ほめあうゲーム・感謝表現の練習・励ます実践（互いに言われて力を受ける言葉を言い合います）・感想・とりまとめ」。
会 社 名	特定非営利活動法人日本ピーススマイル協会

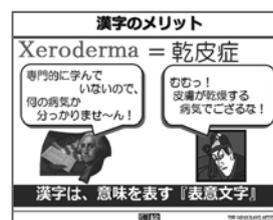
プログラム	自分の将来とお金の話
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・導 入：自分の生活とお金について考える。 ・展開①：将来どんな生活を送りたいか、就職後のライフコースに必要なお金を試算。 ・展開②：資産形成の方法を学ぶ。 ・まとめ：自分にとって最適な判断をするためには何が必要かを考える。
会 社 名	野村ホールディングス株式会社

プログラム	Nomuraビジネス・チャレンジ
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 1時間目 <ul style="list-style-type: none"> ・起業家、イノベーションとは何か：過去の例や現在活躍する2人の若手起業家の映像を見て考える。 ・イノベーションが生まれる仕組み：イノベーションが生まれるプロセスの概説。 ■ 2時間目 <ul style="list-style-type: none"> ・イノベーションワークショップ：グループで課題を決めそれを解決するためのイノベーションを考え、発表する。 ・投資とイノベーション：イノベーションを発展させるための投資の役割を説明。
会 社 名	野村ホールディングス株式会社

プログラム	投資って何？
内 容	導入：自分たちに身近な消費から、会社の役割を考える。 展開①：会社が世の中に役立つ商品・サービスを作るために必要な事を考察 展開②：投資が社会に果たす役割を、実際の会社を例にあげて紹介 展開③：グループ学習。新しいビジネスを起こす起業家とそれを応援する投資家の立場を体験することで、情報を関連づけ活用する「情報活用能力」や、「思考力・表現力・判断力」を育成する。
会 社 名	野村ホールディングス株式会社

プログラム	「未来をつくろう！」 新しいアイデアを創出して、ビジネスを立ち上げる！
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいビジネスアイデアを創出するためのポイントを、クイズやミニワークショップを通じて自らカラダとアタマを動かして、楽しさを実感してもらう。 ・グループワーク、または個人に対する宿題として、社会課題や世の中のトレンドに対して、新しいビジネスアイデアを考えてみる。その上で、良いアイデアを選定し、事業プランまで作って社会人に対してプレゼンテーションを行い、評価してもらう。（良いアイデアを出してくれたグループには、丸紅グループの現場をみてもらう） ・事業紹介動画（https://www.marubeni.com/jp/insight/）をご覧頂き、弊社が世界で手がけるビジネスを知って頂いた上で、ビジネス界で起こる変化と会社の挑戦課題である「既存の枠組みを越える」必要性を簡単に説明。 ・中高生として、自分は今何をすべきか、これからどのような目標をもって取り組んで生きたいか、各個人・グループにより発表してもらう。
会 社 名	丸紅株式会社

プログラム	社会で求められるコミュニケーション力と漢字の重要性
内 容	<p>日々無意識に使っている日本語・漢字について、身近な例と解説・クイズを通して考え、体感することでその魅力に気づく。また、スマートフォンでの変換ミスやRPGゲームなど、生徒の興味を引くテーマを用いたり、クイズなど参加型の時間をとることで、最後まで集中して生徒が講義に参加できる。</p> <p>～目次～</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 第1部 日本語の特性を体感しよう <ul style="list-style-type: none"> ～第1章 日本語と外国語の比較 ～第2章 日本語における漢字の役割 ◎ 第2部 漢字の奥深さを知ろう <ul style="list-style-type: none"> ～第1章 漢字の歴史 ～第2章 常用漢字とは ◎ 第3部 働くうえで求められる日本語力 <ul style="list-style-type: none"> ～第1章 驚くべき社会の変化 ～第2章 コミュニケーション力の重要性 ～第3章 社会で求められる力
会 社 名	公益財団法人 日本漢字能力検定協会



プログラム	～社会に出てからも活用できる～ 伝わる文章作成の“コツ”
内 容	<p>社会変化や将来求められるコミュニケーション力について学び、社会に出てから必要なコミュニケーション力の基礎として、文章力の必要性を理解する。社会に出るまでに身につけたい文章力の基礎を学び、その後の学習につなげる。プログラムは社会人の視点を多く入れてあるため、キャリア教育に活用することも可能。</p> <p>～目次～</p> <p>1) 社会で求められるコミュニケーションの特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・変化の大きい社会環境 ・社会ではどんな文章が求められる？ <p>2) 論理的文章を書くためのコツとは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章作成の際に心がけたい3つのポイント <p>3) 文章読解・作成能力検定（文章検）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章検のご紹介
会 社 名	公益財団法人 日本漢字能力検定協会



平成30年度マッチング実績



企業名	学校と協働できる教育プログラム名	企業と協働する学校
(株)ローソン	埼玉県の子供とタイアップした商品開発 (包括的連携協定10周年記念)	さいたま桜高等学園 伊奈学園中学校
SMBCコンシューマーファイナンス(株)	PROMISE 金融経済教育セミナー	児玉高校・桶川西高校
田辺三菱製薬(株)	くすり、製薬会社の仕事について	大宮高校
(株)アドバンスサービス	企業経営者との意見交換	越谷西高校
CSリレーションズ(株)	現役社長から学ぶ「おもしろい人生の描き方」	三郷工業技術高校
丸紅(株)	「未来をつくろう」 新しいアイデアを創出して、ビジネスを立ち上げる	伊奈学園中学校
(公財)トトロのふるさと基金	トトロのふるさとを知る・学ぶ・守るプロジェクト ～クロスケの家とトトロの森で里山の保全を考える～	所沢高校
(一財)言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ	「世界のことはで話そう！」～多言語・多文化・多様性を楽しむ！～	狭山特別支援学校



参考資料 (フォーラム資料)

小川高校 「ふるさと」創生プロジェクト



埼玉県立小川高等学校

現況と課題

人口減少・・・小川町人口H8:3万8千人 →H30:3万人
 統廃合の危機・・・生徒数H8:9660人 →H30:590人

取組

学校が地域創生に積極的に関わり、地域の人々をつなぎ、未来を作る「地域から学び、地域に貢献する」学校づくり
→地域行事を、中心となって提案、運営

地域への受着・誇りを育む教育
 地域の活性化、魅力ある町づくり

地域の文化・伝統への再注目・地域の課題への問題意識
 未来を切り開く力の育成

6月・7月 「七夕まつり」リリック音楽祭 他各種イベント 司会 運営補助
 対象：放送部 主催：小川町

5月 「嵐山 史跡の博物館ボランティア」ティーチャー
 対象：全学年 希望者 内容：入場した小学生に史跡の説明

11月 「小川小との交流事業」
 対象：希望者 内容：児童と学校行事の進行

12月 「小川和紙マラソン 運営補助」
 対象：全学年 希望者 内容：パレード、路上部、総道部 参加者：約4000人

10月～1月 「小川和紙普及活動」
 対象：3年 10～30名 (聴学選択者) 場所：小川町和紙体験学習センター

4月～8月 「カフェ モザート メニュー開発」
 対象：全学年・希望者 共催：小川町

通年 「介護施設、元氣プラザ等への 出前音楽発表会」
 対象：音楽部 共催：小川町

通年 「防災無線 青バトのアナウンス」
 対象：放送部 主催：小川町・小川警察署

現況と課題

人口減少・・・小川町人口平成8年:約3万8千人 →20年後→平成30年:約3万人
 本校の生徒数減・・・生徒数平成8年:9660人 →20年後→平成30年:590人

●地域の活性化は、地域の伝統校の存続とも深く関連
 ●学校と地域が共通認識を持って、創生に取り組む必要性

取組

学校が地域創生に積極的に関わり、地域の人々をつなぎ、未来を作る「地域から学び、地域に貢献する」学校づくり
→地域行事を、中心となって提案、運営

地域への受着・誇りを育む教育
 地域の活性化、魅力ある町づくり

地域の文化・伝統への再注目・地域の課題への問題意識
 未来を切り開く力の育成

小川町との包括連携協定 地域行事を、中心となって提案、運営

行政との連携が不可欠



平成30年7月19日、本校は、小川町と「連携協力に関する包括協定」を締結。締結式は小川町長公室で執り行われ、撮影・取材にはマスコミのほかにも本校放送部も加わっている。

通年 「防災無線 青バトのアナウンス」
 対象：放送部 主催：小川町・小川警察署

4月・5月 放送部が防犯防災アナウンスを作成。現在、小川町内を巡回する青色パトロールカーは、日々、振り込め詐欺等の犯罪被害防止を促すアナウンスを流している。今年度からこれは、小川高校生の声である。

通年 「防災無線 青バトのアナウンス」
 対象：放送部 主催：小川町・小川警察署

平成30年8月16日、放送部は、小川警察署での感謝状贈呈式に出席。

その後、警察署の方と一緒に、近隣スーパーで「振り込め詐欺等の犯罪被害防止キャンペーン」に参加。

1年間で9億円にも上るといふ県内の振り込め詐欺被害。このような犯罪の撲滅に何と貢献したいと、この日はアナウンスではなく、生の声で、町民の方に被害に遭わないための注意点を訴えた。

6月・7月
「七夕まつり リリック音楽祭他各種イベント 司会 運営補助」
 対象：バレエボール部 放送部 等 主催：小川町



本校は、小川町で開催される多くの地域行事で、司会や運営補助を任されている。平成30年7月28日(土)～29日(土)は小川町の七夕祭り。

70年の歴史を持つ小川町内挙げてのお祭りも、司会進行は本校生徒である。

また、優美な飾りつけはバレエボール部が協力した。

6月・7月
「七夕まつり リリック音楽祭他各種イベント 司会 運営補助」
 対象：バレエボール部 放送部 等 主催：小川町



今年は、小川町商工会青年部が創設されて50年目であった。記念式典が開催され、会場には多くの屋台が並び、歌やダンスなどの催しが行われた。

メインイベントは和紙で作ったスカイランタンの打ち上げ。そこで、本校の有志9名がスカイランタンの作成に協力した。

6月・7月
「七夕まつり リリック音楽祭他各種イベント 司会 運営補助」
 対象：バレエボール部 放送部 等 主催：小川町



小川町の夜空にスカイランタンが舞い、大勢の見物客の皆さんから歓声が上がった。

4月～8月
「カフェ モザート メニュー開発」
 対象：全学年・希望者 共催：小川町



小川小学校下里分校の跡地は、今年4月からカフェ「モザート」に生まれ変わった。本校生徒有志の女子10名は、半年間、こちらの商品開発を行ってきた。

4月～8月
「カフェ モザート メニュー開発」
 対象：全学年・希望者 共催：小川町



平成30年8月1日、生徒の開発したメニューのお披露目。現地には、町役場の方や新聞社の方ほかに、県教育局の方も視察に来ており大賑わいである。もちろん、地元のお客さんもひっきりなしにご来店くださり、ヘルシーなおカラ館かけご飯である「00丼」は早々に売り切れとなった。

10月～1月
「小川和紙普及活動」
 対象：3年 10～30名(総学選択者)等
 場所：小川町和紙体験学習センター



総合的な学習の時間の選択科目「くらしと科学」では、古今東西の紙の歴史を学ぶ。その中で、ユネスコ無形文化遺産である「和紙漉き」を体験し、和紙の可能性について考える。今年は授業外でも、和紙普及活動としてさまざまな取組を行った。

10月～1月
「小川和紙普及活動」
 対象：3年 10～30名(総学選択者)等
 場所：小川町和紙体験学習センター



平成30年11月24日(土)、25日(日)、埼玉伝統工芸会館にて小川町主催による「小川和紙フェスティバル」が開催。今年で第3回となるこの祭典に、本年から本校書道部も参加して、小川和紙の普及に貢献している。

10月～1月
「小川和紙普及活動」
 対象：3年 10～30名(総学選択者)等
 場所：小川町和紙体験学習センター



会場には、絵画や小物、アクセサリなど、小川和紙の様々な可能性が展示物として並ぶ。本校のブースにも書道に興味のある方々が多く来場し、生徒の腕前を称賛してくださっている。生徒も小川町が誇る伝統工芸の普及活動の一端を担えたことに、大きな達成感を味わうことができた。

10月～1月
「小川和紙普及活動」
 対象：3年 10～30名（総学選考者）等
 場所：小川町和紙体験学習センター



本年度から、初任教員の研修にも和紙に関するものを導入。
 これは、学校から自動車まで約5分のところにある埼玉伝統工芸会館での研修風景。

11月
「小川小との交流事業」
 対象：希望者 内容：児童と学校行事の進行



平成30年11月29日（木）、本校生徒有志30名が小川小学校との交流事業に参加。
 午前中は持久走大会の補助。
 午後はグループに分かれて授業の補助を行う。

11月
「小川小との交流事業」
 対象：希望者 内容：児童と学校行事の進行



本校生徒からは、「小学生は素直で本当にかわいい」「機会があればまた来たい」などの声が出ている。
 今回関わった小学生たちが数年後、今度は高校生となってこの事業に参加するという循環を目指している。

12月
「小川和紙マラソン 運営補助」
 対象：バレー部・陸上部・剣道部 参加者：約4000人



平成30年12月9日（日）、第26回小川和紙マラソン大会が開催。
 4000名を超えるエントリーがあり、本校からも陸上部4名と事務部長が参加。
 陸上部、剣道部、バレー部、放送部はスタッフとして運営補助した。

今年度からメイン司会、実況は放送部が担当。

12月
「小川和紙マラソン 運営補助」
 対象：バレー部・陸上部・剣道部 参加者：約4000人



ゴール地点に、本校の剣道部と陸上部が走行タイムの記録係として配置。
 会場では、バレーボール部が観客の誘導係を務めた。

成果

プロジェクトにおける様々な経験を通し、生徒に地域の課題を意識させ、これからの未来を切り開く能力を育成することができた。

高校生が企画段階から参画することで、地域行事に新風を吹き込み、町の内外に、世代を超えて町の魅力をアピールすることができた。

課題

現在は一部の生徒による取組となっている。今後は、生徒全員が取り組めるような仕組みを考案していく。

現在取り扱っている課題は表面的な課題のみである。町の行政との緊密な関係を生かし、生徒にさらに掘り下げた地域課題を発見させ、議論を重ねながら解決策を見出すような取組を加える。

町で唯一の高校である本校が、町の中核校としてどう機能していくべきかさらに検討を重ねる。

埼玉県立庄和高等学校

庄和の未来を共に創る「地域創生」物語

～庄和高校の取り組み～

- 4月 庄和商工会へ協力依頼
- 5月 春日部市へ協力依頼
庄和商工会との課題共有会
- 6月 かすかべ未来研究所からの情報提供
課題設定
- 7月 進捗状況中間報告会
- 8月 市場調査・アンケート活動等
- 9月 文化祭での中間発表
- 11月 庄和商工会へのプレゼンテーション（3年生）
- 12月 庄和商工会へのプレゼンテーション
（2・3年生）

～参加生徒募集～

4月に2・3年生を対象にプロジェクト参加者を募集
3年生 27名
2年生 8名
が参加してくれることになりました。

～活動の流れ～

- 4月 庄和商工会へ協力依頼
- 5月 春日部市へ協力依頼
庄和商工会との課題共有会



庄和商工会の活動内容を教えていただき、庄和地域が抱える問題・課題を知りました。



生徒からも庄和商工会に質問をしました。

～活動の流れ～

- 6月 かすかべ未来研究所からの情報提供
課題設定

<各班の課題>

- 1班:「庄和地域DE庄和生が農業奉仕」
- 2班:「庄和マップを作ろう!」
- 3班:「事故を減らすためには」
- 4班:「春日部の在来大豆を知ろう!!!」
- 5班:「桜台商店街を活性化させる」
- 6班:「庄和町活性化計画!」
- 7班:「庄和高校文化祭&庄和商店街の発展」
- 8班:「サイクルステーションを作ろう」
- 9班:「庄和を活気づけよう」

庄和高校生の課題設定のポイント

- ①南桜井駅前商店街の活性化
- ②住みよい街づくり
- ③庄和の知名度を上げる

～活動の流れ～

- 7月 進捗状況中間報告会
- 8月 市場調査・アンケート活動等
- 9月 文化祭での中間発表



各班の活動を中間報告としてポスターにまとめました。



文化祭でポスターを展示して活動の状況をお知らせしました。

～活動の流れ～

- 11月 庄和商工会へのプレゼンテーション（3年生）
- 12月 庄和商工会へのプレゼンテーション（2年生）



各班の活動状況を
パワーポイントに
まとめて発表しまし
た。



春日部市役所・
庄和商工会の
担当者も参加して
いただきました。

～各班の成果～



文化祭で地元商
店の出店や商品
の販売を行いました。
《1・7班》



春日部在来大
豆の大豆粉を使
ったバナナマフ
ィンを作成しま
した。
《4班》

～各班の成果～

最寄り駅の南桜井駅周辺に
ある桜台商店街を紹介する
ためのマップを作成しました。
《5班》



バザーで集
まったお金
で印刷代を
まかないま
した。
《5班》

～各班の成果～



文化祭で行うバ
ザーのお知らせで
す。地域のみなさん
に協力していただき、
商工会にたくさん
集まりました。
《5班》



～各班の成果～



各班の成果や庄和
地域のことをHPやS
NSで発信しました。
《2・5・9班》

～まとめ～

- ①課題の把握
 - ・アンケートや地域への聞き取りなどを実施する場合はある程度の数を実施する必要がある。
 - ・生徒自身の思い込みにならない注意が必要。
- ②解決する課題の設定
 - ・課題の設定が広くなりすぎると活動の焦点がぼやけてしまう。
 - ・「こうすればこうなる」を発想させて、課題解決の手だてを考えさせる。
- ③地域との連携
 - ・生徒の動きは消極的、もっと積極的に地域と関わる必要がある。高校生が動く地域の方々が親身になって対応してくれる。
- ④活動のその後
 - ・自分たちが実践したことが、どのような影響を与えたかを検証することも必要。
 - ・できればもう一度PDACサイクルをまわす。そうすることで学びは深くなる。

埼玉県立鳩山高等学校

～ハトミライ☆プロジェクト～



埼玉県立鳩山高等学校
生徒会

2018. 3. 28
第1回ふくしまさくらの植樹風景

鳩山高校では…

“笑顔を咲かせる
ボランティア”



2018. 7. 25～26 福島県震災復興ボランティア
2018. 8. 6 鳩山町納涼夏祭りボランティア

をに行ってきました。

ハトミライ☆プロジェクトとは？

【メイン事業】

「桜の植樹」を鳩山町で行い、
“はとやま・鳩高・ふくしま”の
3つが結びつくことで、地域の
活性化につなげていく。

ハトミライ☆プロジェクト

||

鳩高

みんなを
笑顔に！



はとやま ふくしま

☆これまでの活動①☆

6月 第1回打ち合わせ

(鳩山町役場)



2018. 6. 11
第1回打ち合わせ風景



2018. 8. 2 現地視察
NPOの方から説明を聞く生徒会役員たち

8月 現地視察

(石坂の森)



☆これまでの活動②☆

11月 モリ×モリウォーキング(石坂の森)

植樹に向けてのマップ作り
鳩山町コミュニティマルシェで
食堂・カフェ営業
鳩山町との包括連携協定



2018. 11. 17
モリ×モリウォーキング
(石坂の森)での現地視察風景



2018. 11. 8
成長した「ふくしまさくら」



2018. 11. 14 食堂カフェ営業風景



12月 植樹に向けたPR活動開始!

☆NPOの協力団体☆

特定非営利活動法人里山環境プロジェクト・はとやま

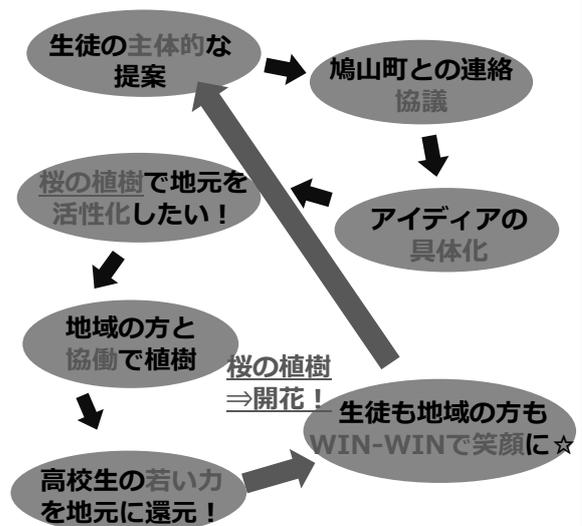
里山環境を環境資源及び住民共有の財産と考え、保全と活用を通じて得た有形、無形の成果を住民に還元しながら、まちづくりに寄与する。(HPより引用)

ふくしまサクラモリ プロジェクト

福島県の皆さんと共に育てた『ふくしまさくら』の苗木を、福島復興のシンボルとして、福島の子どもたちの思いを込めたメッセージとともに、全国の自治体や企業、そして個人のみみなさまにお届けしています。
(HPより引用)

「笑顔😊」の循環イメージ

新たなアイデアの創出!



埼玉県教育委員会「学校地域WIN-WINプロジェクト」
芸術が栄える街づくり ～地域と吉川美南高校が
美(かな)でる芸術創造～

学校のWIN 吉川美南高校

- 吹奏楽部・美術部・書道部・放送部・軽音楽部・家庭科部の活性化
- 生徒会本部を軸に生徒会活動の活発化
- 学校の学びを社会で実践

すいちゃん@美南
校長の一部「よき川よき水川にちなんで本校マスコットキャラクター」

なまりん
西川美南高等学校のイメージキャラクター

※ このプロジェクトは「学校外資源を活用した実社会からの学びを充実するとともに、学校の力を地域で生かす取組を推進する。」埼玉県教育委員会の事業です。

吉川市

地域のWIN

- 学校との絆で社会総がかりの教育実践
- 若者のアイデアや取組で地域活性化
- 地域の力を学校教育で活用

第1の柱 「継続・コミット」

吉川市における芸術系のイベント(ジャズナイト、ロックフェスティバル、吉川市民文化祭、吉川市民祭り、「エフェムこしがや」への出演など)の参加(継続)にとどまらず、企画・運営にまでコミット(約束)する。

第2の柱 「創造・チャレンジ」

「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」が示すポイント「駅前ゾーンに文化的施設の誘致を目指し、吉川市の文化芸術拠点とします。」について、吉川市とともに芸術の街(まち)の創造にチャレンジする。

埼玉県立吉川美南高等学校
芸術が栄(さか)える街(まち)づくり
～地域と吉川美南高校が美(かな)でる芸術創造～

スタートアップ講演会(5/31・木)

吉川市長の中原氏を招き、「もう一步先へ(自分の強みをつかって社会貢献)」というメッセージをいただいた。

学生活動の活性化

- 吹奏楽部・美術部・書道部・放送部・軽音楽部・家庭科部の活性化
- 生徒会本部を軸に生徒会活動の活発化
- 学校の学びを社会で実践

WIN-WINプロジェクトの参加団体(生徒会本部・芸術系部活動)の絆を深めた講演会

地域の演奏家から指導を受ける軽音楽部

生徒会活動の活性化

部活動の活性化

学校の学びを社会で実践

美術部が、吉川市商工会青年部の依頼を受けて、「ジャズナイト」のポスターを制作

創作研究部が「第27回埼玉人権を考える集い」の大型人権看板のためのポスターを制作

学校の学びを社会で実践

美術部が、吉川美南駅東口ロータリーの看板に「まちづくりコンセプト」を表現した絵画を提供

学校のWIN

放送部・軽音楽部・書道部・美術部・生徒会本部が市民文化祭・市民まつり等で、司会進行・演奏・運営補助

埼玉県立吉川美南高等学校
芸術が栄(さか)える街(まち)づくり
～地域と吉川美南高校が美(かな)でる芸術創造～

家庭科部が、地元料理人を指導者として招き、吉川市の名産の「なます」を食材にして、本校PTA・後援会の保護者の方々と一緒に、中華料理と洋食料理に挑戦

きっかけは、吉川市長中原氏「吉川美南高校も、なます料理やろうよ！」の一言から...

食文化に挑戦！
なます料理教室
in吉川美南高校

社会総がかりで教育実践
【「社会総がかり」関係団体】

- 埼玉県教育委員会
- 吉川市長
- 吉川ロータリークラブ
- フードカフェ レガメ
- 中国料理 萬万亭
- 吉川美南高校家庭科部
- 吉川美南高校PTA・後援会
- 吉川美南高校教職員

地域の力を学校教育で活用

地域のWIN

- 学校との絆で社会総がかりの教育実践
- 若者のアイデアや取組で地域活性化

若者のアイデアや取組みで地域活性化

地域の力を学校教育で活用

第2の柱「創造・チャレンジ」
高校生によるアイデア創出会議(10/23・火)

吉川市の掲げる『「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」が示すポイント「駅前ゾーンに文化的施設の誘致を目指し、吉川市の文化芸術拠点とします。」について、高校生たちがフレッシュなアイデアを創出し、吉川市の担当課職員に発表

各グループが、発想支援ソフト「IdeaFlagment2」を使用し、パソコン上でアイデアを出し合い、グループ化していく取組み

生徒のアイデアの中には、「まずは安心安全な街づくりが必要」、「老人の憩いの場が必要」、「運動や娯楽でお腹を空かせて、飲食店に呼び込むストーリー」、「お城を建てて、そのコンセプトに沿った街づくり」など

最後に、各グループが発表を行い、吉川市役所の担当課からアドバイスを

KJ法によるアイデア図

越谷西特別支援学校

～ICTでつなぐ地域きずなプロジェクト～

本校では、越谷総合技術高校と日本工業大学と連携して行いました。取組の内容は、高等部作業学習清掃事務サービス班（通称：C S班）での名刺やラベル・ポスター等の作成ソフトの開発と、自立活動での身体の動きや行動調整のためのフィジカルトレーニングシステムソフト（キネクトセンサーを使ったソフト）の活用です。

開発・改良に向けて

5月に顔合わせを兼ねた打ち合わせを行いました。この取組をとおして、連携学校では技術開発や社会貢献について学んだり、本校の生徒にとっては身に付けた技術がどのように社会の中で役立つのかを体験的に学んだりの機会につなげていくことが話されました。

話し合いの後は、早速パソコン室へ。ソフトの改良や開発に向けて、パソコンや現状ソフト等の状況確認をしました。皆さん熱心に研究し、それぞれの学校での取組の下調べを行っていました。

<プロジェクトの説明>



<仕様についての話し合い>

入力方法や操作性や活用するにあたりどのような機能が必要であるか、そのためにはどのようにするとよいか等、意見交換がされました。



<機材の状況確認作業>

現状の把握をする中で、改良点など具体的に確認していきました。



ラベル作成ソフト

文化祭の製品頒布で使用ラベルシールや商品ポップを作成するためのソフトとして開発していただきました。これまでは、1つずつ手作業で小さなものから大きなものまで作成してました。作成数も多く準備に時間がかり製品の作成に集中する時間が少なくなっており、その解決をしたいという声から発案されたものです。

夏休み中にソフトの試作品が完成し、本校のパソコンでの動作確認や調整を綿密に行い完成しました。本校の環境と開発環境との違いが大きく苦労があったようです。かなりの時間をかけて調整していただきました。

なお、このソフトは埼玉県工業高校生プログラミングコンテスト決勝大会で優秀賞（2位）を受賞しました。

<連携校との仕様の工夫>

操作画面はシンプルで大きく、デザインや配色を考えました。ドラックなどで文字を移動することができる操作性など、生徒にとってわかりやすく簡易で使いやすいものになりました。



<作成例>

1ラベル作成するだけで、サイズ違いのラベルが作成できます。シートの大きさに合わせて、複数枚作成されます。



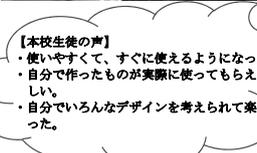
本校のプリンタでの出力も調整でき、9月には使用に向けて最終確認ができました。



【連携校の声】
・操作する人の声を直接聞いて改良や開発ができることは、そのニーズに合わせる大切さを知ることができてよかった。

<作成の様子>

使い方をすぐに覚え、一人で扱うことができる生徒が多かったです。注文に応じて画像を探するなど自分でデザインを考え、オリジナリティあるシールを作ることができました。



【本校生徒の声】

- ・使いやすくて、すぐに使えるようになった。
- ・自分で作ったものが実際に使ってもらえて嬉しい。
- ・自分でいろんなデザインを考えられて楽しかった。

<納品・活用の様子>

作業学習の各班からの注文を受け作成しました。製品頒布で使用しました。



【本校生徒の声】

- ・きれいなシールができてすごい。
- ・準備の作業時間が減ってよかった。
- ・製品作りに時間をかけられるようになってよかった。
- ・いつもよりも他のことがたくさんできたと思う。
- ・みんなが使って喜んでくれるのが嬉しかった。

名刺作成ソフト

本校の生徒用パソコンには、ワード等のワープロ機能のあるものが入っていません。また、市販のソフトでは入力や操作が難しいということがあり、開発をいただきました。トレーニングモードでタイピング練習もできる仕様のため、パソコンを使った作業学習を続けることができています。

また「名刺作成サービス」の出店をし、地域での活動を行いました。接客、作成、納品まで、生徒が分担して行いました。

<作成の様子>

画面の右ボックスに入力すると、名刺該当のスペースに反映されるようになっています。自分で作った満足感と、渡したときの「ありがとう」の気持ちは、作業能力の向上に加えて大きな価値ある学習になっています。



納品時には、達成感や相手の気持ちを知ることができます。

<越谷総合技術高等学校文化祭>

開発チームの皆さんが、教室の装飾やパソコンのセッティングなどの準備をして、迎えてくださいました。



【本校生徒の声】

- ・たくさんの高校生がきてくれて楽しかった。
- ・少し緊張したけど、喜んでもらえてよかった。

【連携校の声】

- ・自分たちの取組がどのように活用されるのかわかり、次につなげたい。
- ・自分の学校の生徒との交流にもなりよかった。

<越谷市民まつり>

越谷ライオンズクラブさんからお誘いをいただき、地域の皆さんとのふれあうことができました。御挨拶でお渡しする名刺もCS班が作成しています。



【地域の声】

- ・皆さんしっかり対応ができて、素晴らしいです。
- ・本当に使える立派なものが出来ていてすごいなと思いました。
- ・生徒さんの取組がわかってよかったです。

<県庁オープナー>

小松教育長様をはじめ、埼玉県職員や地域の方々に来ていただきました。親子でいらっしゃるお客様も多く、小さな子供たちからの作成依頼に、優しい言葉で接する姿が印象的でした。



<本校文化祭>

開発チームの方も来校し、活動の手伝いに来ていただきました。このような交流も楽しみの一つになりました。

【生徒の声】

- ・いろいろな人の名刺を作るのは大変だったけど、楽しい。
- ・たくさんの人が喜んでくれて楽しかった。
- ・練習したとおりにできて良かった。
- ・失敗しないようにするのは、とても緊張した。頑張った。
- ・たくさんの人が来てくれて、びっくりしたけど楽しかった。
- ・とても忙しかった。仕事の大変さがわかった。
- ・少し緊張したけど、喜んでもらえてよかった。

フィジカルトレーニングシステムソフト

体の動きを学習していくシステムです。日本工業大学から機器やソフトをお借りして取り組んでいます。画面に映る動物を見ながら、タッチして消していきます。消す部位は「手」「足」「頭」から任意に設定できるので、取り組みたい動きや取り組む人の課題に合わせて調整ができます。連携校では、今後システムに関する研究成果を発表していく予定です。

なお、本校の作業学習の外部活動において、老人ホームの利用者様とのコミュニケーションツールとして、レクリエーション活動での利用も進めています。

<改良の様子>

子供たちがより意欲的に取り組めるよう、励みとなる効果音をつける、目標になるタイム設定があるとよいのではないかという意見が出されました。また、理学療法士から助言をいただき、システム内で評価ができるよう機能やモード追加する等が進められています。



【連携校の声】

- ・実際の現場に出て外部の人からの要望を実現するという経験ができてよかった。
- ・これまで知らない現場に行く機会が得られ、知ることができてよかった。
- ・異なる視点や分野からの提案や意見の交換ができてよかった。
- ・身につけた技術をどのように社会に生かしていくかを考える機会となった。

<取組の様子>

課題に合わせて取組方法を設定していきます。直接触れないということもなかなか難しいものですが、自分からいろいろな動きを行い楽しみながら取り組んでいます。また、体の動きだけではなく、二人で協力して行う等の調整にも取り組んでいます。



Kinect センサー

このカメラで動きをキャッチします

画面の様子です。
○(部位)が動物にふれると動物が消えます。



【本校教員の声】

- ・この連携がなければ、こういうものがあることを知ることもなかった。
- ・教材の広がりになりよかった。
- ・新しい技術を授業に取り入れる機会となり、視野が広がった。
- ・ねらいに対して違う形のアプローチとなるものとなり効果がある。

取組をとおして

違う視点からの教材提供が、子供たちの活動や取組の幅を広げることになりました。また、地域や同年代と交流することができ、互いの理解を深めることもできました。本校の生徒は、自分の力で名刺を作成することができ、自信が持てるようになりました。名刺作成は、地域から御注文をいただき、さらに経験の幅が広がっています。連携校にとっては、ソフトの開発、試用、改善をとおしてスキル向上や社会のニーズに応えるという経験につながられました。なお、このつながりをきっかけに、大学の他研究室との連携も始めることになりました。

提出日 平成30年12月12日

学校名 県立北本高等学校

1 学校概要

(1) 所在地

北本市古市場1丁目152番地

(2) 生徒数（平成30年12月1日現在）

普通科 527名

(3) 目指す学校像

「生徒一人ひとりの個性を伸ばし、生きる力を地域社会とともに育む学校」

(4) 学校概要

本校は、開校44年目を迎える北本市唯一の高等学校である。「生徒一人ひとりの個性を伸ばし、生きる力を地域社会とともに育む学校」を目指す学校として、北本市教育委員会支援の下、小学校・中学校等の相互交流事業を推進するとともに、地域ボランティアに積極的に取り組み、地域と一体になった教育活動を展開している。

2 内容

北本市・北本市教育委員会、市内関連機関等との地域連携による取組

3 目的

地域に関わる総合的な探究を通して、自己の在り方生き方を考えながら、探究の見方・考え方を深めて、適切な課題の発見と解決に取り組むことができる生徒を育成するため、以下の資質・能力を育成する。

- 地域に関わる探究の過程で、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付ける。
- 地域と自分自身との関わりから、問いを見だし、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報をもとに分析したりする力を身に付けるとともに、論理的にまとめ、表現する力を身に付ける。
- 持続可能な社会の実現を目指し、探究活動に主体的・協働的に取り組むとともに、住みよい街づくりに積極的に貢献しようとする意欲・態度を育成する。

4 北本市の連携先及び連携内容

(1) 北本市教育委員会学校教育課

北本市小中高相互交流事業（K I S E P）による中丸小学校、市中学校体育連盟、市内4中学校との連携

(2) 企画財政部秘書広報課

北本市広報の本校コラム記事等（別添北本市広報誌参照）

(3) 企画財政部企画課：

北本市長と語る会、きたもとの未来をしゃべくり懇談会

(4) 市民経済部産業振興課：

商品開発（トマころクッキー）、北本まつり宵祭ねぶた山車制作等。

(5) 市民経済部環境課

市内ゴミ拾い活動（530プロジェクト）

(6) 総務部契約管財課

北本市公共施設マネジメント市民ワークショップ

(7) 選挙管理委員会

18歳選挙権・投票等への啓発取組への協力、明るい選挙推進協議会との座談会

(8) 社会福祉協議会

交通安全キャンペーンで「いったん止まっと」を駅街頭で配布（12月）

(9) 北本市ロータリークラブ

青年のつどい企画運営（3月）

(10) その他

鴻巣警察署 1 日警察署長・署員、埼玉中央たばこ商業協同組合「未成年者喫煙防止キャンペーン」、北本市市民文化祭芸術展出展

5 取組内容

(1) きたもとの未来をしゃべくり懇談会

月 日	内 容	場 所
平成30年 8月18日	北本市在住一般参加者、専門学校生、大学生、本校生徒等、約50名が参加し、「北本まちづくりワークショップ」を実施した。北本市長から市政運営状況を伺った後、小グループでKJ法による討議を行った。	北本市文化センター 会議室
生徒の探究活動		
<p>・市政運営状況を踏まえ、「人口減少に対応するためのリーディングプロジェクト」の推進策やそのことを的確に発信していくためのシティーセールス案について、KJ法によりグループ討議を行った。また、グループで考えた策や案を、全グループが発表し、参加者で共有した。</p>		
		
<p>【市政状況報告】 【参加者による討論】 【グループ発表】</p>		

(2) 明るい選挙推進協議会との座談会

日時・場所：平成30年7月25日（水）・本校普通教室

内容：選挙広報の在り方や若者の投票率アップについて、座談会形式で意見交換を行った。

6 現在までの成果・課題（地域連携における課題、教育課程上の課題）

(1) 成果

「北本市長と語る会」や「きたもとの未来をしゃべくり座談会」では、市政や街づくりに関して高校生の視点から考え、一般市民と意見交換することができた。また、発表活動は、市長及び市職員へ提言する機会となり、参加した生徒の社会参画意識の高揚の一助となった。また、明るい選挙推進協議会との座談会では、若者の投票率を上げるための、選挙に関する広報の在り方やPRの仕方等を、北本市選挙管理委員会及び明るい選挙推進協議会の方々と意見交換し、政治を身近に感じる機会となった。

(2) 課題

今年度は、北本市と行っている連携を、生徒に「探究」を意識させながら行ったものの、参加人数が限られ、継続性も欠けている。これを学校全体の探究活動にするためには、各連携事業から「探究課題」にできるものを設定し、生徒が主体的に調べ、考え、話し合い、そして提言する連続的な活動へと再構築する必要がある。

提出日 平成30年12月14日
 学校名 県立越生高等学校

1 学校概要

越生高校は、古い歴史を持つとともに自然環境に恵まれた越生町西和田地区に、昭和47年に設立され、本年で47年目を迎える。創立以来、多くの卒業生を輩出し、地域社会の発展に大きく貢献してきた。

本校の目指す学校像は、「生徒一人一人の長所を伸ばし、社会で活躍できる人財の育成を目指す学校」となっている。生徒の持てる力を最大限に伸ばし、夢の実現に向け力強く支援している。

所在地 埼玉県入間郡越生町西和田600番地

生徒数 普通科296名、美術科110名、計406名

2 内 容

越生高校や生徒の出身中学校近隣地域の公共施設等における職業体験

3 目 的

- ・公共施設における職業体験を通して、社会性やコミュニケーション能力を高める。
- ・地域の課題を考え、主体的に地域社会に参画する態度を養う。
- ・働くことの大切さを学び、卒業後の進路や将来及び未来について考える契機とする。

4 連携先及び連携内容

越生高校近隣地域や生徒の出身中学校近隣地域の公共施設等での職業体験

5 取組内容

月 日	内 容	場 所
10月3日(水) ～ 10月5日(金)	公共施設等の職業体験	越生高校近隣地域や生徒の出身中学校近隣地域の公共施設等

6 現在までの成果・課題（地域連携における課題、教育課程上の課題）

- (1) 成果 学校生活の中にはない貴重な体験を通して、達成感と成功体験が得られた。
- (2) 課題 地元出身の生徒の引き受けとなっている施設があるため、生徒が希望する地域や職種の調整が困難であること

7 写 真

【介護施設にてシーツ交換】



【図書館にて書籍整理】



【消防署にて救命講習】



【乗馬クラブにて馬のブラッシング】



8 生徒の感想

【消防署での職場体験】

1 日目ははじめてだったのでかなり緊張していましたが、隊員の皆さんが丁寧に教えてくださったので、なんとか終わることができました。楽しかったですが、慣れるのには時間がかかってしまいました。

2 日目の午前は道具説明とロープ渡り訓練、午後は放水訓練をしました。この日は実際に隊員の皆さんが現場で使用している道具を見せてもらったり、実際に行っている訓練を見せていただきました。僕が一番記憶に残っているのはロープ渡りです。これは川の向こうなど、普通では向かうのが困難な場合に使われる方法で、ロープに吊るされながら救助に向かうというものです。僕も体験したのですが、簡単なようで体力を使うものでした。

3 日目は午前に救命講習、午後にははしご車体験を行いました。午前中に参加した講習では倒れた人に人工呼吸や心臓マッサージをして蘇生させる方法を学びました。いろいろと手順がありましたが、戸惑うことなくクリアできました。午後は、はしごが30mのビルはしご車に乗り、上から越生を見渡しました。特に高い所が苦手なわけではなかったので思う存分上からの景色を堪能しました。

【乗馬クラブでの職場体験】

ここでは、初心者から上級者までの乗馬教室を始め、馬主さんから預かった馬の世話をしたりしています。馬が気持ちよく過ごせるように馬屋の掃除などに気を配ります。私たちが3日間主に行った仕事は雑草抜きや枝ひろいなどの馬場の整備と、馬屋の掃除や馬のお皿洗いなどです。また、馬のブラッシングなど、馬と直接触れ合う仕事もお手伝いさせていただきました。それらの仕事をこなしていくうちにわかったことは、素早くやったほうが良い仕事と時間をかけたほうが良い仕事があるということです。馬のお皿洗いや馬屋掃除などは手早く、馬のブラッシングや犬のお散歩などの生き物と触れ合うときは時間をかけて接していました。

職員さんは時間の少ない中で、あれは手早く、これは時間をかけて・・・などと考えながら仕事をしていてすごいな、と思いました。そして馬屋そうじでは、馬の性格はトイレの散らかし方でわかるということを知りました。排せつ物をいちいち場所をかえ、そのうえ足でふみちらす子や、きちんと決まった場所でトイレができる子など、その馬の性格によってさまざまなのだそうです。

最後に、私は3日間、乗馬クラブで仕事を手伝わさせていただいて改めて命を守ることの大変さを感じました。

平成30年度
「学校地域 WIN-WIN プロジェクト」
実践報告書
埼玉県教育委員会

平成31年3月発行

編集 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課

〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1

電話 048-830-6979

FAX 048-830-4964

E-mail a6975-05@pref.saitama.lg.jp

WIN
PROJECT
WIN